令和2年度

研 究 紀 要

秋田県立雄物川高等学校

巻 頭 言

校長　清　水　達　也

４年前の平成28年12月、新学習指導要領策定に当たって、中教審は答申の中で「予測困難な時代に、一人一人が未来の創り手となるためには予測できない変化に受け身では無く、主体的に向き合って関わり合い、その過程をとおして、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手なっていけるようにすることが重要である」と提示しました。「予測できない変化」とは、知識・情報・技術を巡る変化の早さが加速度的となり、人間の予測を超えた情報化やグローバル化といった社会的変化が進展する現況を捉えたものです。ところが皮肉なことに、今私たちが直面している「予測できない変化」とは、情報でもグローバリゼーションでもなく、古代の昔から何度となく人間社会を恐怖のどん底に陥れてきた病原菌、ウイルスの流行でした。

さらに続けて、答申は人間の持つ力に言及して、「感性を豊かに働かせてどのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え出すことが出来る」「多様な文脈が複雑に入り交じった環境の中でも、場面や状況を理解して自ら目的を設定し、その目的に応じて必要な情報を見いだし、情報を基に深く理解して自分の考えをまとめたり、相手にふさわしい表現を工夫したり、答えのない課題に対して、多様な他者と協働しながら目的に応じた納得解を見いだしたりすることができるという強みを持っている」としました。

生徒たちが活躍する未来で求められるのは、「解き方があらかじめ定まった問題を効率的に解いたり、定められた手続を効率的にこなしたりすることにとどまらず、直面する様々な変化を柔軟に受け止め、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかを考え、主体的に学び続けて自ら能力を引き出し、自分なりに試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして、新たな価値を生み出していくこと」であろうと、答申は唱えます。これらは旧学習指導要領にも「生きる力」「課題発見・解決能力、論理的思考力」などというかたちで取り上げられてきました。

このような生徒が持つ力を十分に引き出して、未来を担う人材として育成するための基盤として、一人一人が主体的に学びに向かう姿勢を確かなものにすることが重要です。それには教師が日々の授業改善を進め、授業力の向上をはかることが基本になります。

さて、今年度本校では、指導主事訪問にあわせて、「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり」というテーマで取り組みました。私たちの一年間の取組を振り返り、次年度に向けた方策の助けとなるようまとめました。ご高覧いただければ幸いです。

令和２年度　雄物川高等学校　研究紀要

目　次

《巻頭言》	校　長	清水　達也	1
目次			2
《校内研修》			
・令和２年度　指導主事訪問			
各教科の重点目標と取組			3
国語科研究授業	国語科	千田　玲央奈	6
家庭科研究授業	家庭科	小松　久子	10
・校内相互授業参観研修について		研　修　部	14
・職員研修 「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり」		研　修　部	16
《経験年次別研修》			
・教職５年目経験者研修から	国語科	千田　玲央奈	26
・実践的指導力向上研修講座から	保健体育科	宇佐美　大輔	29
		能美　カンナ	33
・高等学校中堅教諭等資質向上研修を終えて	家庭科	小松　久子	39
《報告》			
・令和２年度　授業アンケート　集計結果			47

令和２年度　授業改善への取組

課　題

「主体的な学びに結び付く、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり」

具体的な方策

１　本時のめあて（目標）やポイント、学習内容、学習の流れ、活動手順等を視覚的に提示する。

２　ペアワークやグループ学習等、生徒が自分の意見や考えを筋道を立てて発言し、互いの考えを伝え合うことで、理解を深める機会をつくる。

３　授業アンケートを１回目は１学期末に実施し、その課題解決に向けた取組を行う。２回目は２学期末に実施し、課題解決の状況を評価し、３学期から次年度の目標設定に活用する。

ユニバーサルデザイン（UD）の視点を取り入れた授業実践

１　時間の構造化

～活動の順番や所要時間、時刻の事前提示～

①本時の目標（ねらい）を明記する

②本時の流れを明記する

③本時のまとめを明記する（この時間に何を学習したかを確認）

２　場の構造化

～整理整頓、活動や動線を考慮した教材の配置～

①黒板に書くのは授業の内容のみ

②１クラスの連絡は廊下側の黒板（ホワイトボード）へ

③教室内の掲示物は整理して後方の黒板へ

④物の置き場所を決める

３　刺激量の調整

～光や音、室温への配慮、学習のねらいや活動に応じた教材の提示～

各教科の取組

教科	課題達成のための重点項目	進　捗　状　況　（10月時点）
国語	１　課題文における問題点や疑問点等を互いに指摘し、検討し合えるようにグループで意見交換する場面を設定する。 ２　ホワイトボードや学習シートを活用し、思考の過程が分かるような支援を行う。	１　毎時間ペアワークやグループワークを行い、意見交換を行っている。 ２　ホワイトボードや学習シートを活用し、個や全体で思考の過程を確認できるようにしている。

教科	課題達成のための重点項目	取　組　状　況
地公	1「本時のめあて」を授業の最初に示し、本時の流れと目標を確認する。 2ペア・グループワークの司会、記録、発表者のローテーションを行い、他者の意見も踏まえて表現出来る力を身に付ける。	1　毎時間「本時のめあて」を授業の最初に示し、本時の流れ、生徒の活動内容、到達目標を確認している。 2　グループ学習等で、他者の意見を踏まえて、道筋をたてて、自分の言葉で表現する機会を多く設定している。
数学	1「本時のめあて」を授業の冒頭に板書し、口頭で流れを説明する。 2問題の板書の前に、ペアまたはグループで解答を確認し合う時間をとる。	1はほとんどの授業で実施している。 2はコロナの関係で以前のようにはできなが、ペアワークを中心に実施している授業が多い。
理科	1「本時のめあて」を始めに確認し、黒板に明記したままにする。 2　パワーポイントを活用する。 ・スライドに、学習の内容、学習の流れ、活動手順等、今どういう活動をしているのかが分かるような工夫をする。 ・生徒の発表内容を、箇条書きで提示し、全体で共有する。必要に応じて、互いに質問し合い、説明させる。	学習内容にもよるが、概ね全ての授業において重点項目は徹底されている。ただし、指導する側で、どれだけユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業を展開しても、その視点を見ることのできない生徒が何人かいるため、つきっきりで支援する存在が必要と思われる。
保体	1本時の目標及び授業の流れが明確になるような板書の工夫（色分け、数字等）をする。 2個々の考えをまとめてグループへと、またその反対の流れができる学習シートを活用する。	体育では今までホワイトボードを活用して授業内容を可視化してきたが、今まで以上により具体性を持たせた書き方にしたところ、生徒も授業内のホワイトボードを確認しながら授業を進めている事が増えた。今後は現在用いているシートを変更して授業を展開する。
芸術	1本時の目標をホワイトボードに明記する。また、まとめプリントを活用し、学習内容を明示する。 2映像資料をホワイトボードに映し、要点を解説したり、生徒に発表・記入させたりしながら、内容を確認する。	重点項目について実施しているが、定着しない生徒への個別指導の仕方と時間の確保が課題となっている。

教科	課題達成のための重点項目	取　組　状　況
英語	１本時の目標を始めに確認し、黒板に明記したままにする。 ２ペアワーク、グループワークを通して生徒同士が教え合うことにより、学習内容の定着を図る。 ３補助プリントで日本語と英語を対比させ、英語への理解を深める支援を行う。	１　実施している。 ２　内容に応じて実施している。得意な生徒にとっては、自分たちで考えることで内容の定着が進むが、不得意な生徒は答えのみを書き取ろうとしており、定着につながらないことがある。 ３　実施している。
家庭	１本時の目標を明示し、学習の見通しをもてるようにする。 ２ペアやグループで自分の考えを共有する機会をつくり、考えを深められるようにする。 ３実習では視覚的に理解できる資料を提示する。また、習熟度を考慮した小グループ学習を行い、知識・技術の定着を図る。	目標をワークシートやスライドのみへの明記になっているので、黒板にも明記して分かりやすくする必要がある。 ペアやグループでの活動では、他者の考えを書き写す作業になってしまい、考えを深めるに至っていない場合があるので、発問や声かけなどに工夫が必要である。
商業	１本時の目標を明示し、黒板に明記したままにする。 ２ペアワーク、グループワークを行い、自他の考えの共有を深める。補助プリントの使用により、学習内容の定着をはかる。	目標は明示している。 ペアワーク、グループワークは科目や学習内容によって適宜実施している。
情報	１本時の学習活動を明示する。 ２ワークシートを活用して、要点を説明し合い、学習内容を確認させる。	学習活動を明示することで見通しを持って取り組んでいるが、要点を話し合う段階までには至っていない。

国語科（国語総合）学習指導案

実　施　日：令和２年１０月８日（木）６校時
ク　ラ　ス：１年Ｂ組
使用教科書：『新編国語総合改訂版』大修館書店
授　業　者：千田　玲央奈
場　　所：１年Ｂ組教室

１　単元名

本のＰＯＰを作ろう

２　単元の目標

（１）目的や場に応じて、効果的に話したり的確に聞き取ったりしようとする。　（関心・意欲・態度）
（２）目的や場に応じて、効果的に話したり的確に聞き取ったりする。　（話す・聞く能力）

３　単元と生徒

（１）単元観

自分のお気に入りの本の魅力を紹介するために、ＰＯＰ作りを通して読者を引きつける文章を工夫して書かせるとともに、分かりやすい表現に努めさせたい。その上で、効果的に話したり的確に聞き取ったりする力を育成することをねらいとしている。作品の特徴をしっかり読み取った上で、効果的なキャッチコピーなどを考えたり、工夫したりすることによって言語感覚を豊かにすることができる。また、読書生活の充実につなげることも意図している。

（２）生徒観

１年Ｂ組は男子１８名、女子１５名のクラスである。物静かで黙々と学習に取り組む生徒が多い。しかし、自分の考えを筋道立ててまとめることが苦手だったり、人前で発言することに抵抗があったりするため、毎時ペア学習やグループ学習を取り入れるようにしている。その効果もあって筋道立てて述べることに課題はあるが、少しずつ自分の意見は伝えられるようになってきた。

４　指導と評価の計画

（１）単元の評価規準

Ａ　関心・意欲・態度	Ｂ　話す・聞く能力
目的や場に応じて、効果的に話したり的確に聞き取ったりしようとしている。	目的や場に応じて、効果的に話したり的確に聞き取ったりしている。

（２）単元の指導計画

１時間目　ＰＯＰとはどのようなものかを知り、紹介する本を選ぶ。
２時間目　表現を工夫してＰＯＰを作る。
３時間目　グループでＰＯＰを紹介し、意見や感想を交流する。（本時）

５　本時の計画

（１）ねらい

・ＰＯＰを用いて本の魅力を効果的に説明し、他の人の説明を的確に聞き取ることができる。

（2）展開

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入10分	・本時の目標を全体で確認する。 ＰＯＰを用いて本の魅力を効果的に説明し、他の人の説明を的確に聞き取ろう。 ・学習の流れや手順などを提示する。	・本時の目標を提示して、学習内容を確認させる。 ・視覚的に示し、見通しが持てるようにする。	
展開35分	・ＰＯＰを見せながら話すことを自分でまとめる。 ・グループになり、発表の順番を決めてから始める。 ・発表者は本の魅力を聞き手が理解できるようにわかりやすく伝える。 ・聞き手はメモしながら大事なことなどをしっかり聞き取り、必要に応じて質問をする。 ・相互評価シートに読みたくなった理由などを記入する。 ・意見や感想を交流する。 ・感想をシートにまとめる。 ・数人発表をし、全体で共有する。	・本を選んだきっかけも含めて制作意図をしっかり話せるようにしておく。 ・様々な気づきをメモさせる。 ・他の人のＰＯＰを見たり、意見を聞いたりして参考になった点をまとめさせる。 ・要点を確認する。	・表情や視線、声の調子に配慮し、工夫点などを筋道立てて説明している。（B） ※机間指導を通して相互評価シートや発表の点検。
まとめ5分	・本時の振り返りをする。	・学んだことなどを記入させる。	

評価の観点：Ａ関心・意欲・態度　Ｂ話す・聞く能力　Ｃ書く能力　Ｄ読む能力　Ｅ知識・理解

令和２年度　第２回指導主事訪問　授業研修会の記録（国語科分科会）

【指導者】櫻田　瑞子　高校教育課　指導主事（国語）
【授業者】千田玲央奈
【記録者】釜田啓子
【参加者】糯田、鎌田、高橋（正）、加藤、柴田、阿部、能美、石垣

１　授業者から

１年Ｂ組はおとなしいクラスで話し合いが不得意である。しかし回数を重ねるごとに打ち解け、話し方も工夫できるようになった。１ヶ月前課題である「主体的な学びに結び付く、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり」を踏まえ、学習の流れを明確にして授業を進めた。本のＰＯＰ作りはゴールではなく手段であり、本の魅力を伝えるのが目的である。本時は話すこと、聞くことを中心に進めた。話す時間は不足していたが、生徒たちは楽しんでいた。頑張っていたと思う。

２　参観者の感想

・黒板を見れば何をすれば良いか分かる授業だった。やるべきことが把握でき、何を目標としているのかを、最初と途中で確認できる。生徒自身の目標も立てやすい。授業内容については、自分の知らない本や作家について知り、刺激を受けるとともに、読書の幅を広げることができると感じた。
・静かで表現活動が難しいと思われる生徒たちだが、普段とは違う表情を見ることができた。生徒の良さが出ていた授業だと思う。授業が「見える化」されていたところも良かった。
・楽しそうに人の話を聞く、拍手するといった生徒の姿を見ることができた。指示が伝わりにくい生徒がいるが、要所要所で適切な指示ができており、要支援の生徒も良くできていた。
・時間は押したが、最後までぶれずに進めているのがすばらしい。メモを取ることについて、ある程度の訓練が必要だと実感した。
・指示が的確で、若いのにしっかりした授業ができている。
・おとなしい生徒が多く、心配していたが、先生が一人一人に声かけをしていた。緊張していたと思われるが、積極的に取り組めていたと思う。作成したＰＯＰを学校祭で見てもらえたら嬉しい。
・今何をする時間かが明示されていて良い。評価について、「話す」能力は声の大きさなどで評価できるが、「聞く」能力を評価するときはどうするのか。またプリントのメモ（フリースペース）を大きく設けているが、目的があってそのようにしているのか。
・生徒の特性を理解した上での授業だった。支援が必要な生徒が多く、「話す」「聞く」

ことも難しいが、苦手な中でも確認しながら頑張れたのではないか。話す声が小さい生徒が多かったが、周りの生徒に聞く姿勢があった。ＰＯＰの出来も、本の内容に合わせて表現できていて、優れていた。

・板書に工夫がなされており、目標や流れが一目で確認できるところが良かった。ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業が実践できており、とても勉強になった。

3　１ヶ月前課題を中心にした各教科の課題

・授業の流れが見通せるような工夫をしている。色の使い分け、板書デザイン、ノートの取らせ方など、視覚的に分かりやすく提示するように心がけている。

・時間の流れが見えるように黒板に流れを書き、マグネットなどを利用して、今どこをやっているのかを示している。

・今日の授業はトリオ学習だったが、地元の中学校でトリオ学習をやっていたため、生徒たちにはなじみ深い。自分も基本はトリオで取り組ませている。数学部会の研究授業では、いろいろな人の考えを吸収できるように、ワールドカフェ方式を取り入れていた。

・ホワイトボードを活用し、他のクラスが取り組んでいることも「見える化」している。ワークシートも工夫し、全員に自分の課題を書かせるようにしている。「なぜその種目を選んだのか」を考えさせることによって、目標が立てやすくなった。段階的にレベルアップしてきている。

・「めあて」をしっかり書いている。

4　指導助言

ユニバーサルデザインの視点による授業改善がなされた良い授業だった。目標や指示が明確で見通しが明るく、生徒が活動しやすい授業だった。授業の構成力が素晴らしい。「話す・聞く力をつけるためにこのような活動をしたい」というのが明確で、それを授業に生かしている。また、読書の可能性を広げたという意味でも素晴らしい。新学習指導要領で読書の重要性について謳われている。雄物川高校は立派な図書館があるので、生徒たちにはたくさんの本を読ませてほしい。今回の授業のように読書のチャンスを作ってもらいたい。さらに先生の教師力がすばらしい。授業の中での生徒とのやりとりから、規律や信頼関係を感じた。普段からの指導の賜物である。また「生徒にメモをとる習慣をつけさせたい」という意味でも、他教科の取り組みへの示唆に富んだ授業だった。他教科でも応用できると考える。

改善点としては、「話す力」について、「効果的に話す力」をもっとクローズアップすると良かった。先生が例を出し、効果的に説明することについて生徒に考えさせると良いのではないか。

ユニバーサルデザインの授業はまずやってみることが大切である。やってみて工夫し、皆で共有する。工夫し続けることに意味がある。

家庭科　科目「家庭総合」学習指導案

実　施　日：令和２年１０月８日（木）６校時
対象生徒：２年B組　２７名
使用教科書：「家庭総合～ともに生きる・未来をつくる」
第一学習社
授　業　者：小松　久子
場　　所：２年B組教室

１．単　元　名　　６章　食べる　３節　食生活の安全のために　②食品の選択と保存
〔学習指導要領　内容（４）生活の科学と環境　ア　食生活の科学と文化〕

２　単元の目標　　栄養、食品、調理及び食品衛生などについて科学的に理解させ、食文化に関心をもたせるとともに、必要な知識と技術を習得して安全と環境に配慮し、主体的に食生活を営むことができるようにする。

３　単元と生徒　　生徒観：男子１４名女子１３名、計２７名のビジネスコース・進学コースで学ぶ生徒である。じっくりと課題に取り組む生徒が多く、分からないことにも自分なりの考えをもとうとする姿勢が見られる。積極的に発言する生徒もいるが、発信する力に課題をもつ生徒も少なくない。食生活については関心が高く、特に実習では意欲的に調理する姿が見られる。

教材観：日本の食生活は改善され、豊かになったと言われている。しかしその反面、食物が簡単に食べられるようになったことで食事に対する関心が薄れ、食生活の乱れにつながってしまっている現状もある。これは単に健康上の課題だけでなく、食料自給率の低下、食品ロスや食品容器ゴミの増大、日本食文化の消滅など、様々な問題にも目を向け、自分のこととして捉える必要がある。そして、授業をとおして持続可能な社会を構築する上で求められる食生活の在り方を考え、自己の生活での実践に結びつけさせたい。

指導観：多様に変化している現在の生活を踏まえ、健康に配慮し調理することを基本としつつも、様々なライフスタイルや場面に合わせた食事のしかたがあることを考えさせる。しかし、その際に、自分の生活だけでなく社会における課題にも気付かせ、自分自身の食行動が持続可能な社会を構築することにもつながっていることにも気付かせたい。

４　指導と評価の計画　（総時数５時間　　本時５／５時間目）

学習内容	学習活動		到達目標	指導の手立て
３　食生活の安全のために	1	食中毒の予防法を理解しよう	・食中毒の種類と予防方法を理解し、それを説明することができる。【知識・理解】	・視聴覚教材を活用するとともにワークシートを工夫し、食中毒の種類と予防法について理解させる。
	2		・生活の中での予防方法について考え、それを実践しようとすることができる。【思考・判断・表現】	・具体的な場面を設定し、生活の中での食中毒予防について考えることができるようにする。
	3	表示を見て食品を選択できるようになろう	・加工食品の表示の意味を理解し、それを説明することができる。【知識・理解】	・実物提示を行い、表示について理解しやすいように工夫する。
	4		・場面に合わせて表示を読み取ることができる。【思考・判断・表現】	・具体的な場面を設定し、様々な表示を場面に応じて読み取ることができるようにする。
	5	様々な食事のしかたについて考えよう	・ライフスタイルや状況に合わせた食事のしかたを、社会の様々な問題に配慮しながら選択することができる。【思考・判断・表現】	・様々な食事のしかたを比較させることで、場面に応じて食事のしかたが変化することに気付かせる。

5．本時の実際

（1）本時のねらい

ライフスタイルや状況に合わせた食事について、現代の食生活の課題を踏まえて考えることができる。

【思考・判断・表現】

（2）学習過程

学習内容		学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入5分		1．事例について、どのような行動をとるか自分の考えを書く。 2．様々な食事のしかたを整理する。	・自分のこととして考えられるように場面設定する。 ・4つの食事スタイルを挙げられるように、調理実習で調理した牛丼を例に挙げて考えさせる。	
展開35分	ライフスタイルや状況に合わせた食事のしかたを考える	**学習課題1　それぞれの食事スタイルのメリット・デメリットを考えよう**		
		3．4つの食事スタイルについて、メリットとデメリットを考える。（個→グループ） 4．意見を黒板で共有する。	・多くの視点に気付くように、経済性・調理・後片付けなど食事の過程に目を向けて考えるよう助言するとともに、考えるポイントをスライドに明示する。 ・食生活を取り巻く問題について配慮する必要があることを理解できるよう、既習事項をスライドに示す。	
		学習課題2　それぞれの食事スタイルが適する場面を考えよう		
		5．4つの食事スタイルが適する場面を考える。（個→ペア） 6．意見を黒板で共有する。 7．ライフスタイルや状況に応じて食事スタイルを選択する必要があることを理解する。	・考えが出にくい生徒に対しては、自分の生活に照らし合わせて考えるよう助言する。 ・どの食事スタイルを選択するにも知識・技術が必要であることを理解できるように、既習事項をスライドに示す。 ・事例を挙げ、調理することが基本であることに気付けるようにする。	食事スタイルを選択するときに配慮する視点を、自分の言葉でまとめることができる。 【思・判・表】 ・ワークシート ・観察
まとめ10分	学習のまとめ	8．授業で学んだことをプリントにまとめる。	・食事スタイルを選択するときに配慮することを、学習内容を踏まえて自分の言葉でまとめるよう助言する。 ・考えを共有するために、数名の生徒に発表してもらう。	

令和２年度第２回指導主事訪問授業研修会の記録（家庭科分科会）

【指導者】丹　啓記　高校教育課指導主事（農業）
【授業者】小松久子
【記録者】小林朗子
【参加者】有賀、細井、髙橋（弘）、菊地、浅野、宇佐美

1　授業者から

家庭科では，知識・技術はもちろんだが、人生において何を選択するか考える授業を心掛けている。今回も手作りが良いとされがちだが、様々な形、ライフスタイルに合わせて選択できるよう授業した。生徒にメリット・デメリットを出してもらったが、意見が出にくく助言をもう少し工夫したいと思った。時間内に終わらせたく、１つのゾーンを１つの班で様々な意見を出してもらったが、ジグソー法などを使いもっとみんなの意見を聞きたいと思った。また、１ヶ月前課題でもあったが、生徒が自分の意見や考えを道筋を立てて発表出来ていない。そのため、生徒が貼ったものを教師が発表してしまった。もっと生徒に話させる場面を作りたい。

授業では、考えるのが大変な時には資料をスライドで、本筋はプリント、黒板と使い分けている。黒板には１時間の流れが残るようにしている。今日はまとめまで行けずに残念だ。次の授業でまとめをし、生徒と共有したい。

2　参観者の感想

・２Ｂでコースごとの授業を担当しており、今回は全体授業でいつもと違う生徒の姿が見られた。
・支援が必要な生徒をグループ学習でカバーしていた。
・この学校にはコミュニケーションを苦手とする生徒が多い。グループ活動やディスカッションなど就職試験に向けて、どのように手をさしのべて、力を付けさせていくのか。２Ｂでもこのような生徒が２名（美術部）いる。部でもコミュニケーションが苦手。周りの生徒を使って、どのようにコミュニケーションスキルを身に付けさせていくのか。
・家庭科は生徒の身近な分野であり、気付きの授業だった。
・掲示されたものが、ユニバーサル視点であり、大変見やすい。
・プロジェクターの使用が慣れている。
・シートが工夫されていて、グループでの話し合いの時間が多くとれていた。
・最後までいかなかったが、生徒は「気付き」が出来ていて良かった。
・１ヶ月前課題が計画的に行われていた。
・グループ学習の際の生徒の意見は先生の予想内か予想外か。
・グループ学習は、意見の言える生徒と言えない生徒が出る。言えない生徒は、言える生徒を参考にしながら、底上げをしなければいけない。上の生徒にとっては、ある程度の知識だけで完結してしまう。
・ツイッターのスライドは良かったが、まとめなどで先生からのメッセージがもっとたくさんあった方が、出来る生徒の「気付き」になる。
・ユニバーサルデザインは、出来る生徒にとっても効果的だが、低いところで終わる。

・経済性で考えた場合のメリット・デメリットのように様々な視点から考えさせ、「手作りがいいと決めつけないで」というメッセージがもっとあっても良い。
・生徒指導の観点からは、最後に机を戻す際の私語。
・興味がわいて分かりやすい授業だった。
・卒業後に活きる授業だった。
・色々な想定内の意見が出てきて、分かりやすく、みんなが理解出来る授業だった。
・黒板に貼った、シートが良かった。体育の授業で、個人目標を書かせて掲示したい。
・黒板への掲示、スライドで見せたりと視覚的に分かりやすかった。
・考えさせる際に１０分計っていたが、ヒントや指示をする際にタイマーを止めていた点が良かった。（実際に１名の生徒に指示が通っていなかった）
・プリントに記入する際に、すべて書かせずに赤線を引いたところだけを書かせる指示が良かった。
・話を聞く、考える、書くなど指示が分かりやすくて良い。
・資料を掲示すると答えをリードするのではないか。
・グループ意見を貼った後、表に出てこない意見を先生が生徒に聞きながら書いていた点が良かった。
・食事の４つのパターンは子供と大人で違ってくる。生徒の意見を聞いていて面白かった。

3　指導主事による助言
・グループ学習は「主体的・対話的で深い学び」であり、各学校によって課題は異なる。現状の課題を学校全体で組織的に話し合って助言してほしい。そうすることで、雄物川高校のグループ学習になる。
・今年度末までにタブレットを配布予定。今回のようなシートを貼る代わりに、タブレット内で共有したり、電子黒板に撮したりと ICT を上手く活用してほしい。
・１ヶ月前課題を意識した授業だった。生徒は何を話し合えば良いか理解していた。ユニバーサルデザインの観点から、達成されていたと思う。

4　その他
質疑応答
・タブレットでは生徒の意見が映し出され、意見共有できる。タブレットで解消されることは多くあるが、書くことや表現力など取り残されてしまう。文字を書く力はどこで補っていくのか。
指導主事による助言
　タブレットはツールの１つ。大切なことは、雄物川高校でどういう生徒を育てるかの共通理解である。タブレットは、授業に応じて使っていくべき。タブレットが有効なときに使っていくことである。

令和２年度　校内相互授業参観研修について

研 修 部

１　目　的　　教員が相互に授業を参観することにより、自らの課題の改善の手立てを考える機会とし、生徒の学力向上に活かす。

２　期　日　　令和　２年　９月１４日（月）、１５（火）

３　方　法

（１）　全職員がこの両日のうち一時間の授業を公開し、少なくとも一時間を参観する。

（２）　時間がないときは、部分参観でも可とする。

（３）　参観者は、参観シートに記入する。参観シートは二部作成し、一部は授業者へ、もう一部は、研修部に提出する。研修部提出用は、研修部フォルダに保存も可。

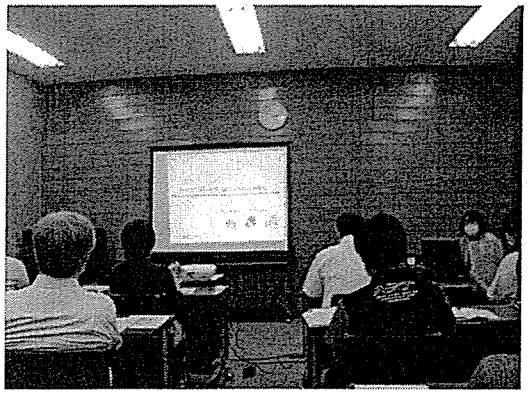
１ヶ月前課題

「主体的に学びに結びつく、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり」

～相互授業参観研修から～

・教科書、学習課題ノートをより分かりやすく、ポイントをかいつまんでの板書が参考になりました。（国語総合）
・「ヨーロッパの国々について調べよう」という単元のようでしたが、スマートフォンを活用して生徒が主体的に調べ学習を行った様子が見えました。ＱＲコード作成アプリの提示など、授業者の準備が必要不可欠な授業だと感じました。最新の技術を取り入れてらっしゃるところが素晴らしいと感じました。（地理）
・グループ編成をする際に、核となる生徒を配置できるか否かというのは課題だと感じました。また、インターネットを活用する場合は、情報の信憑性についても生徒に確認させなければならないことを再確認できました。（地理）
・スマホを利用してＱＲコードを使っての国の紹介は斬新でした。生徒に取って身近なスマホを使っての学習であることから、「学び」が身近になっているように感じました。ＱＲコードの利用は生徒も楽しんでいたように思います。大変、参考になりました。（地理）
・本時の目標が示されていて、到達目標がわかる。利用する公式が黒板に掲示されており、既習事項の復習になる。生徒とのやりとりから、先生と生徒達との信頼関係がうかがえる授業でした。（数学Ⅱ）
・一人ひとりの生徒の机を回り、わからない箇所や間違っている箇所などをその生徒に合わせて説明していた。問題の板書の前に生徒同士で答えあわせをさせ、確認し合う時間を設けていた。（数学Ⅱ）
・字が大きく見やすい。生徒が能動的に動けている。生徒と会話ができている。（数学Ⅱ）
・わかりやすい指示とパワーポイントを活用したユニバーサルデザイン、時間配分が参考となった（化学基礎）
・サポーターの必要性を感じました。（化学基礎）
・ＡＬＴとの役割分担と個別の学習とグループワークの使いわけが参考になりました。（英語表現Ⅱ）
・チョークの色の使い分けが参考になりました。（コミⅠ）
・整然と授業が進められ、教室いっぱいの人数でありながら、生徒は集中して作業に取り組んでいた。個々の生徒はやるべきことに集中し、生徒が解答する順番も定まっており、日頃から指示が徹底しているのだと思いました。チョークの使い方が統一していて分かりやすいと思いました。（コミⅠ）
・導入で行った普段自分が衣服を購入する場面を書き込む学習は、日常の生活を振り返り、振り返ったことを文字にすることで整理する良い機会になっていると感じました。その後他の生徒の記入したことを確認するために自由に最低３人に聴き取りを行う方法はグループ学習とは違い、積極的に移動する様子をうかがうことができました。（家庭総合）
・布をほぐして糸にし、糸をほぐして繊維を確認し、それをプリントに貼付けて残すことで印象に残る良い方法だと思いました。学習プリントの内容が思考の順に配列されていて学習しやすい。授業の準備、教材研究が綿密にされていると感じました。（家庭総合）
・６校時の終わりに伺ったため、後片付けの頃の参観となりました。満足げに試食している生徒たちの姿が印象的でした。実習（後片付けも）は、大変、落ち着いており、日頃からの積み重ねた指導が徹底されているのだと感じました。（フードデザイン）
・学び合い、教え合いが活発に行われていてよかった。（ビジネス基礎）

職員研修会　　ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり



期　日	令和２年７月２７日
至	本校会議室
講　師	横手支援学校 教諭兼教育専門監 菅原　咲希子　先生

特別支援学校に在職しているので、高等学校の視点がよくわからないのですが、ユニバーサルデザインの視点から本日、話していきたいと思います。

はじめに、「現在、自分が授業で取り組んでいる工夫は？」「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業のイメージを書いてください。」普段から先生方が工夫して取り組めているから、これらに答えられると思います。先々週、雄物川高校の授業を拝見しまして、既にユニバーサルデザインの取り入れられていると思いました。

〔シート３〕濃い緑と薄い緑の境界線はどこだと思いますか？子ども達の障害の特徴を濃淡で表すと、どこまでが障害でどこからが健常でしょうか？特徴がはっきりしている子どももいれば、よくわからない子どももいる。障害だけで子どもを分けるのは間違いである。「どこにつまずき、苦手なことは何か。」に注目する。わからない原因は何か、障害の有無でなく、つまずきの原因を明らかにするのが大事です。やり方、学び方は人それぞれ違います。視覚優位な子どももいるし、聴覚優位な子ども、運動優位な子どももいる。認知面での偏りがある場合は、子どもの得意な学習スタイルを活用します。『鱶』（ふか）を読めますか？『鱸』（からすみ）は読めますか？　どちらも目にする機会がない漢字ですが、同じ画数でも「鱶」は書いたことがある漢字の組み合わせで、「鱸」は右側がなじみがないので書きにくい。あなたなら、この漢字をどんな方法で教えますか？教師の教え方に子どもがあわせるのではなく、子どもの得意な学習スタイルを活用することでわかりやすくなります。

どこにでも発達障害の傾向をもった子どもはいます。授業中に起こるつまずきの特徴は、障害とまではいかない人にも多かれ少なかれ同じ特徴が見られます。〔シート８参照〕バリアフリーとは、障害を持った方の使いやすさから考案され、作られたもの。全ての人にとって使いやすいのがユニバーサルデザインです。ユニバーサルデザインの授業づくりとは、全ての子どもにとって、わかる授業づくりをしていく。特別支援教育の視点を生かして、できない子どもができるようになるために工夫することです。ついていけない生徒のためだけの授業ではなくて、誰もがわかる授業づくりです。「教科の本質を見失わない」、「指導内容等の質的なレベルは下げない」授業づくりです。

〔シート１２〕授業のユニバーサルデザインの階層を表しています。左側がつまずきで生じる子どもの特徴、右側がつまずきを除く方法を表しています。授業の土台は「参加」、「理解」であり、この二つのことについて今日はお話しさせていただきます。

〔シート１３〕特別支援教育ではあるが、全員が参加できて知識と技術を身につけられ

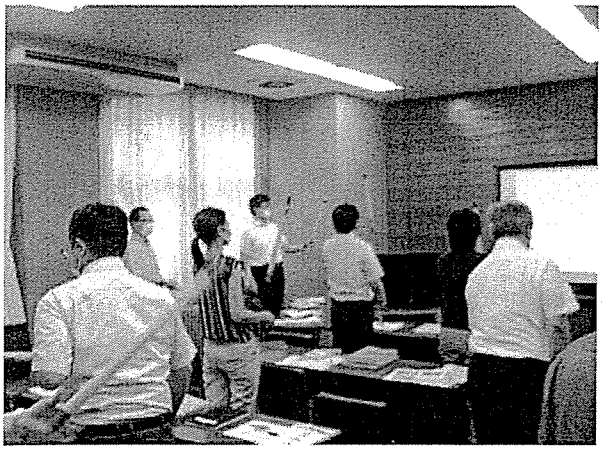
るように教科指導と特別支援教育の二つの視点で配慮していく。教科の専門性に特別支援教育の視点を加えていくことで全ての子どもが参加できるような指導の工夫をしていくことです。つまずきを予想して、その手立てをしていく。例えば「集中が続かない」原因は、何を学習しているのか、どんな活動をするのか、どこまでやればよいのか、次にどんなことをするのかなどの見通しのなさへの不安、関心のムラなどがあがります。手立てとして、１時間での授業をパターン化する。ゴールの提示、刺激量の調整、指示の工夫があります。少し頑張ればいいと見通しが立てばやる気になることも多いものです。

〔シート１６〕全ての子どもが参加できるような指導の工夫の一つ目として学級が安心できる場となることがあげられます。分からないことを受容し、認め合う関係づくりが必要です。リクリエーションが安心した学級づくりに効果があります。たとえば「コグトレ」少年院で取り入れられ、「見る」、「聞く」「体を動かす」など全員でできて、自分の得意と相手の苦手を認知し、心を開く認知行動トレーニングです。近隣校では西仙北高校１年生さんが取り入れています。

二つ目としては、ルールの明確化です。例えば、板書のチョークの色の使い方を統一するなど。障害をもっている子どもは、暗黙のルールは苦手です。はっきりと示した方がよい。

＜コグトレ実践＞　物と自分の体をコントロールする「棒運動」

①縦回転



②バランス棒

③みんなでキャッチ

みんなでやることで、思いやりや相手のことを考られるようになることがねらいです。

〔シート１７〕人間の脳は何も無いところをずっと見ることは容易ではありませんので刺激量の調整が必要です。教室の前方に掲示物がありすぎるとよくないです。雄物川高校の教室を見させて頂きましたが、配慮されていて、統一感があり、整然と掲示されていました。ＡＤＨＤ傾向の生徒には効果的です。また、張り物は全て外した方がよいというのは誤解です。小学校で「コ」の字型の机配置がありますが、ＡＤＨＤの子どもには刺激がありすぎます。

〔シート１８〕場所の構造化とは整理・整頓のことです。物の置く場所を決めて、整理された教室環境にします。

〔シート１９〕認知能力に偏りがある場合、言葉で話しても処理しきれないので視覚で補い、見通しを視覚で補います。視覚と聴覚で見通しを補います。

ここまでが、全ての子どもが参加できるような指導の工夫としての基礎的環境整備となります。

つづきまして、全ての子どもが理解できるような指導の工夫についてお話しさせて頂きます。〔シート２１〕聞くだけの時間を減らし、充実させるために「焦点化」「共有化」「視覚化」していくことです。

〔シート２２〕焦点化は、子どもの思考が流れていくようにすることです。

〔シート２３〕社会科の授業の一場面ですが、方向性を整え、間口の狭い質問を用意し、何を答えるのか、何を考えるのかを焦点化して本時のねらいに合うようにします。

〔シート２４〕視覚化は、考えることを支援することです。文字の色、大きさで見やすく示すとともに、単に見せるのではなく、適切な場面で示します。

〔シート２５〕板書の工夫として、どこに何を書くのかがいつも決まっている。左側にめあて、右側にまとめを記入する。見やすさ、わかりやすさ、書きやすさに配慮します。行間囲み、チョークの色、文字の大きさなどで工夫します。黄色は必ずノートに取ることとして、どの教科も共通のルールにします。キーワードや短いセンテンスでわかりやすく書きます。

〔シート２７〕実習の手順など家庭科などで動画で説明したり、間違いやすい所に印を付けたり、文字を大きくする。必要な情報を必要な時に示すなどの工夫があります。

〔シート３３〕Ｂ４プリントでわかりやすく作成している例。

〔シート３６〕共有化とは、ペアやグループで考えたり、教え合うことです。最後は自分の考えをまとめさせます。中には参加できない生徒がいます。人と話すこと自体が苦手な子どもはスモールステップで、細かな達成感を持たせることも有効かと思います。

〔シート４０〕①ユニバーサルデザインの視点で工夫して指導し、工夫しても理解が難しい子どもは、②付せんを用いて指示するなど配慮が必要で、それでも難しい場合は③いつまで提出するにか、どこまでやるのかを個別な指導する。三段構えで指導します。

ユニバーサルデザインの視点はツールの一つです。視覚化し、共有化するために話し合い活動をすることが指導の工夫ではありません。児童生徒が「分かった」「できた」を実感できたかどうかを視点に手立てを検証することが大切です。どの子どもにとっても分かりやすい授業、過ごしやすい学級をつくり上げてゆく上で、「みんな　違って　みんないい」は、キーワードと思います。ご静聴ありがとうございました。

令和2年7月27日

雄物川高等学校職員研修会

ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり

○はじめに・・・
○ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり
○新学習指導要領解説より

横手支援学校　菅原 咲希子

はじめに・・・

・現在、自分が授業で取り組んでいる工夫を書いてみましょう

・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業のイメージを書いてみましょう

2

子どもたちを理解する

濃い緑と薄い緑の境界線はどこですか？

果汁20%のオレンジュースもあれば、
果汁100%のオレンジュースもあります。
同じ濃度の果汁でも味や色はちがいます。

どこにつまずいているのか。苦手なことは何か。

3

つまずきの要因は？

- 不注意・多動がある
- 気持ちのコントロールが苦手
- 見通しのなさへの不安がある
- 理解するまで時間を要する
- 認知の偏りがある（視覚・聴覚）
- 複数平行作業が苦手

4

新しく購入したDVDレコーダーをテレビと接続するときどうしますか？

A　完成図を見て同じようにつなぐ
B　説明書を読んで順番につなぐ
C　とりあえずつないでみる
D　人に聞いてつなぐ

やり方（学び方）は一人一人違う

（指導者は自分の得意な方法で教えることが多い）

5

	視覚	聴覚	運動感覚
九九	九九表を見る	声に出して唱える	カードを並べる
漢字	フラッシュカード	語呂合わせ	空書きで書く
体の働き	図を見る	話を聞く	体の模型を作る

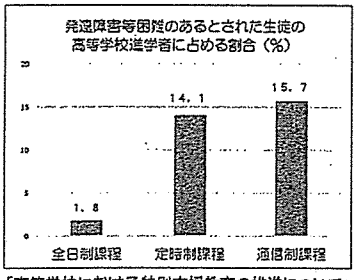
教師の教え方に子どもが合わせる

↓

子どもの得意な学習スタイルを活用する

6

発達障害等困難のあるとされた生徒の高等学校進学者全体に対する割合
2．2%



「高等学校における特別支援教育の推進について」
高等学校ワーキング・グループ報告　平成21年8月27日

発達につまずきのある子どもがいることを前提とした授業づくり、学級経営が必要

7

発達障害のつまずきと どの子供にも生じるつまずき

階層名	発達障害のある子供に授業のバリアを作り出す特徴	どの子供にも起きがちな授業のバリアを作り出す特徴
参加	状況理解の悪さ	学習準備の悪さ
	見通しのなさへの不安	全体の進み方の理解不足
	関心のムラ	発言態度の未熟さ
	注意集中困難／多動	気の散りやすさ
	二次障害（学習意欲の低下）	引っ込み思案、自信のなさ
理解	認知のかたより（視覚・聴覚）	指示の聞き落とし、質問の意図の取り間違い
	学習の仕方の違い	得意、不得意の存在
	理解のゆっくりさ	協力しての作業の苦手さ、話し合い学習の苦手さ、学習内容を深めることの苦手さ
	複数並行作業の苦手さ	受けた説明内容の混乱
	曖昧なものへの弱さ	思い込みをする傾向、断片的な理解をする傾向
習得	記憶の苦手さ	繰り返し学習の苦手さ
	定着の不安定さ	学び続ける態度の弱さ
活用	抽象化の弱さ	知識の関連づけの弱さ、応用への弱さ
	般化の不成立	日常生活に結び付ける意識の低さ

小貫悟氏（明星大学人文学部教授）による　教育ジャーナル2016　9月号より

8

ユニバーサルデザインとは？

障がいのある人の便利さ使いやすさ
という視点ではなく、
障がいの有無にかかわらず、
全ての人にとって使いやすいように
はじめから意図して作られた
製品・情報・環境のデザイン

9

ユニバーサルデザインの視点による授業づくりとは

通常の学級の授業において、特別な教育的支援が必要な生徒だけでなく、全ての児童生徒が主体的・意欲的に活動できるよう、授業への参加や学習内容の理解、習得・活用を促す指導・支援を工夫すること

（秋田県特別支援教育校内支援体制ガイドライン三訂版増補版）

10

ユニバーサルデザインの視点による授業づくりとは

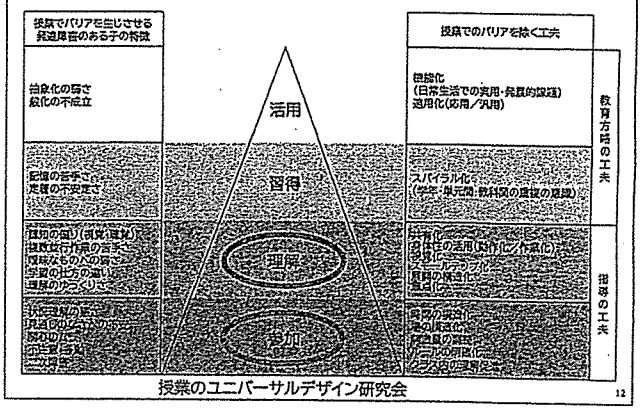
通常の学級において特別支援教育の視点を生かした指導・支援を工夫することにより、全ての子どもにとって「分かる・できる」授業を構築すること

H30南の要望より

- 特別な支援が必要な子どもも可能な限り包括し、個別的な配慮も含み、種々の工夫によりどの子も「分かる・できる」授業を目指す
- 教科の本質を見失わない
- 指導内容等の質的なレベルは下げない

11

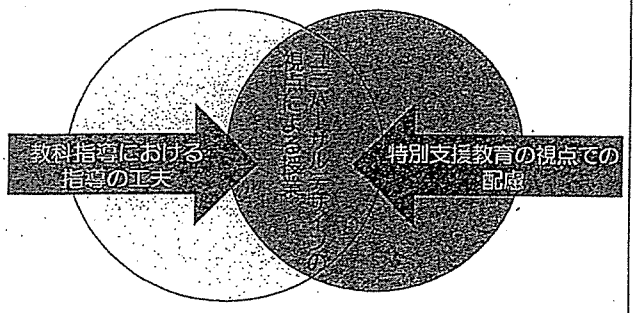
授業のUD化モデル（2012年度版）



授業のユニバーサルデザイン研究会

12

「分かる」「できる」授業



13

学習面の指導　「指導の工夫」の観点と具体例

全ての子どもが参加できるような
「指導の工夫」

14

授業づくりの流れ

つまずきの想定
- 集中が続かない

↓

つまずきの原因の予想
- 状況理解の悪さ
- 見通しのなさへの不安
- 関心のムラ　など

↓

手立ての工夫
- 授業の流れをパターン化
- 活動のゴールの提示
- 刺激量の調整
- 指示、発問の工夫　など

15

全ての子どもが参加できるような「指導の工夫」

○学級内の理解推進
- 間違いや分からないことを受容し、お互いを認め合う関係づくり　たとえばコグトレ・・・

○ルールの明確化
- 発言や聞く態度、ノートの書き方等のルールの明確化と共有

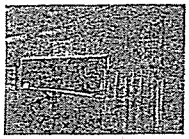
◇助けてもらえる安心感
◇間違っても許容される安心感
◇違っていい安心感
◇ルールがある安心感　等

16

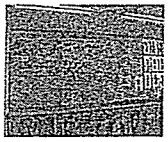
全ての子どもが参加できるような「指導の工夫」

○刺激量の調整

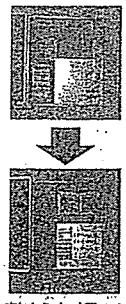
・光や音、室温への配慮。学習のねらいや活動に応じた教材の提示



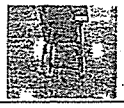
必要なときは
カーテンで目隠し



統一感のある
色づかい



整然と掲示



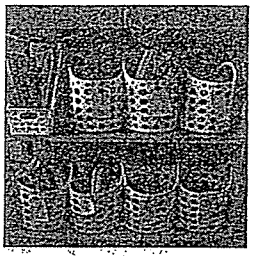
音への配慮

17

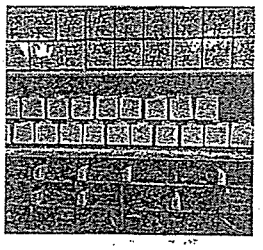
全ての子どもが参加できるような「指導の工夫」

○場所の構造化

・整理整とん、活動や動線を考慮した教材の配置



物の置き場所を決める



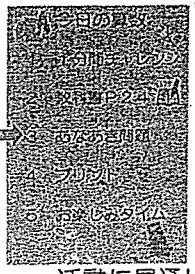
整理された教室環境

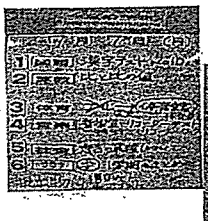
18

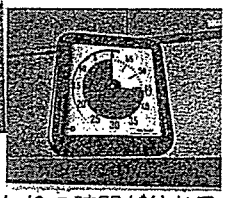
全ての子どもが参加できるような「指導の工夫」

○時間の構造化

・活動の順番や所要時間、終了時刻や目安時間の事前提示







活動に見通しがもてる

終わりの時間が分かる

19

学習面の指導　「指導の工夫」の観点と具体例

全ての子どもが理解できるような
「指導の工夫」

20

不参加が生じやすいのは「聞く」時間

「聞く」時間を

減らす　充実させる

↓

「焦点化」「共有化」「視覚化」

↓

「考える」時間の増加

21

全ての子どもが理解できるような「指導の工夫」

○焦点化（シンプル）

・学習のねらいの焦点化

- ・本時のねらい、活動の流れを示す
- ・一つの指示で一つの課題を出す（一指示一動作）
- ・学習を細かいステップに分ける（小さな成功体験）
- ・何をどこまでするのか、終わったらどうするのかを明確にする

22

T:「1970年の燃えるゴミの量はどれくらいですか」※1部分的に隠している
C:「3000トン」
T:「この後ゴミの量はどうなっていくと思いますか」※2
C:「増える」「変わらない」「減る」
T:「みんなの予想は増えるが多いようですが、答えを見てみましょう」
C:「ほら、やっぱり増えている」
T:「予想どおりだったね。じゃあなぜ年々増えていくのかな。ペアで話し合ってください」
C:「人口が増えたから」「日本が豊かになったから」
T:「するどい意見です。全部正解です。次に見せる資料で説明できる予想があります。どれでしょうか」
C:「人口が増えると燃えるゴミの量は増えていく」
T:「では2010年を見せます」
C:「えっ！」「おかしい！」
T:「今、おかしいと言う発言がありましたが、何がおかしいと思ったか想像できる人はいますか」
C:「2000年から2010年は人口が増えているのにゴミの量が減っている」
T:「なぜ人口が増えたのに燃えるゴミの量は減ったのでしょうか」※3

23

全ての子どもが理解できるような「指導の工夫」

○視覚化（ビジュアル）　聴覚情報＋視覚情報＝内容の理解

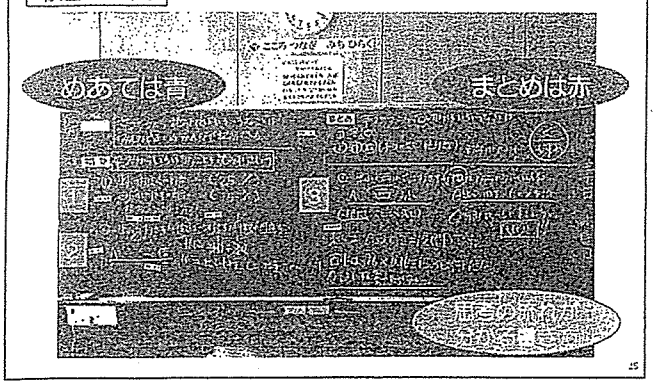
・絵や図、具体物、表、グラフ等の活用、思考の過程をたどることができる板書

- ・手本、見本、模型、完成図を示して、イメージをもたせる
- ・パネルやフローチャート、具体物を示して説明する
- ・学習過程が分かるように板書を工夫する
- ・注目させたい部分は強調して提示する

24

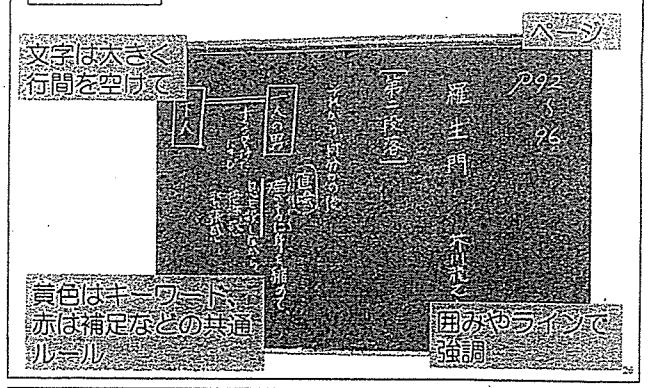
全ての子どもが理解できるような「指導の工夫」

板書の工夫



全ての子どもが理解できるような「指導の工夫」

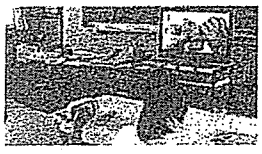
板書の工夫



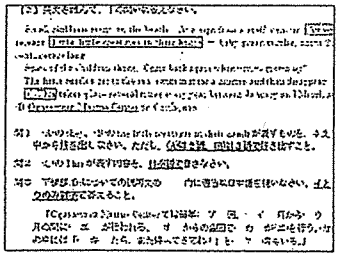
全ての子どもが理解できるような「指導の工夫」

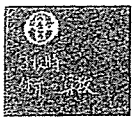
視覚化

動画で説明



テスト問題の配慮

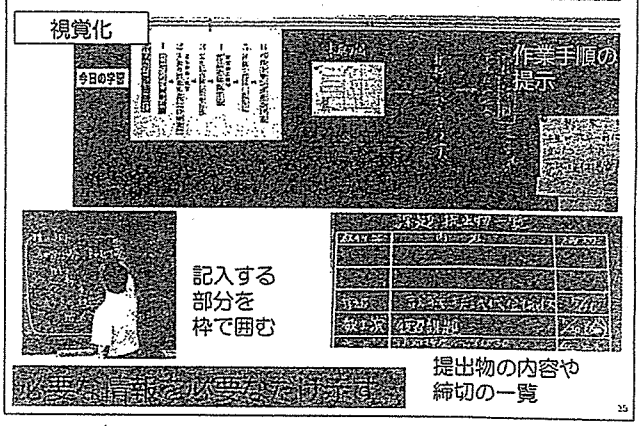




変更の予告

全ての子どもが理解できるような「指導の工夫」

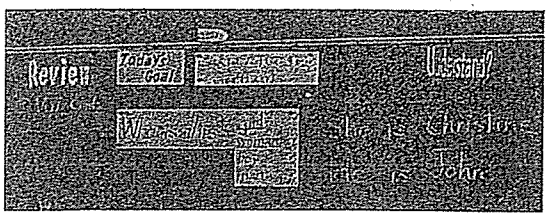
視覚化



全ての子どもが理解できるような「指導の工夫」

板書の工夫

構造化

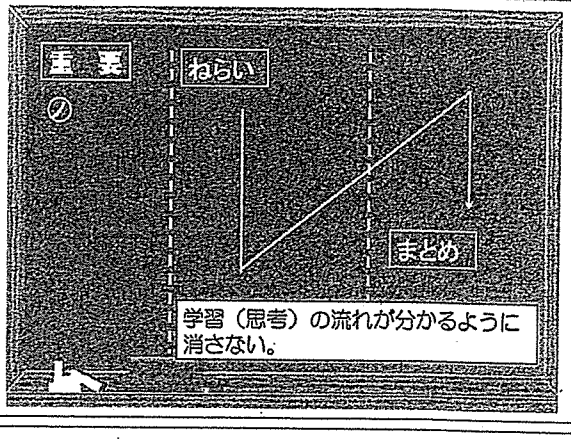


復習

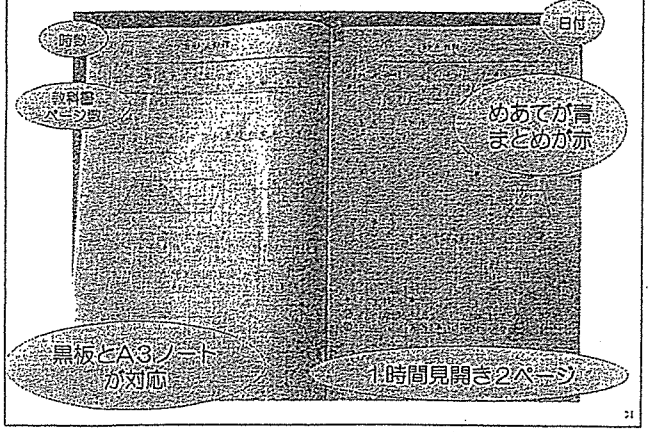
まとめ

課題

全ての子どもが理解できるような「指導の工夫」

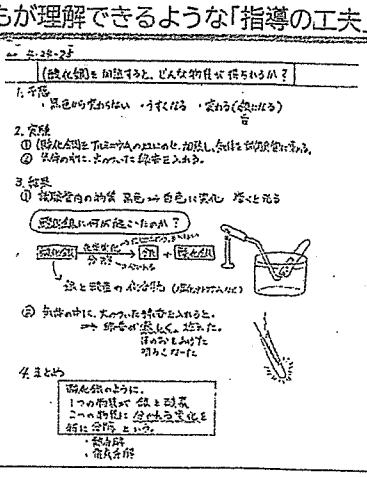


全ての子どもが理解できるような「指導の工夫」



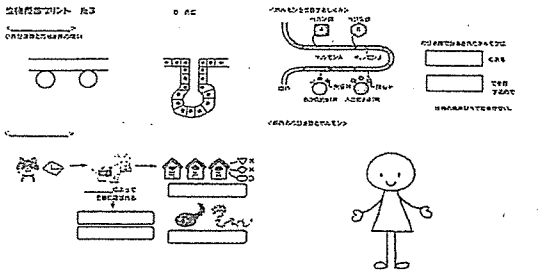
全ての子どもが理解できるような「指導の工夫」

ノートの工夫



全ての子どもが理解できるような「指導の工夫」

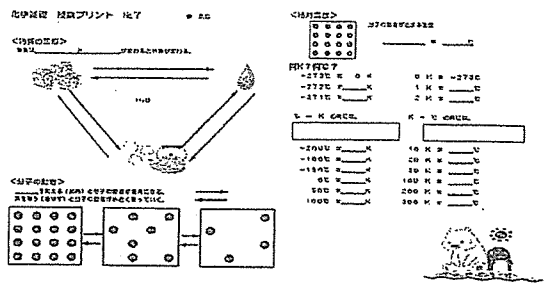
プリントの工夫　　参照:小坂高校



33

全ての子どもが理解できるような「指導の工夫」

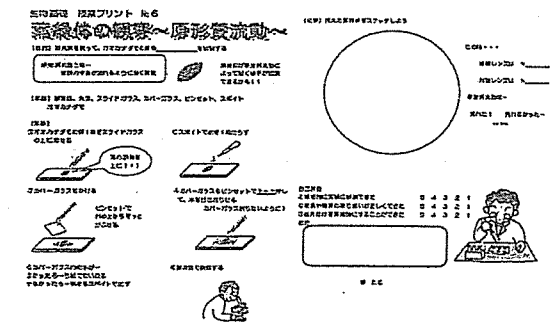
プリントの工夫　　参照:小坂高校



34

全ての子どもが理解できるような「指導の工夫」

プリントの工夫　　参照:小坂高校



35

全ての子どもが理解できるような「指導の工夫」

○共有化
・話し合う、教え合う、協力し合う場面の設定

36

全ての子どもが理解できるような「指導の工夫」

○共有化(シェア)
・話し合う、教え合う、協力し合う場面の設定

・個人思考から集団思考へつながるように工夫する
・子どもの望ましい発言や行動を評価・称賛する
・子どもの発言(誤答も)をつないで授業を展開し、ねらいに迫る
・自分の言葉で説明し、理解を図る

37

全ての子どもが理解できるような「指導の工夫」

○展開の構造化
・焦点化した学習のねらいを達成するための手立ての吟味
(授業スタイルのパターン化　等)

○スモールステップ化
・課題達成のための「踏み台」づくり
(子どもの実態に応じて活用)

○身体性の活用(動作化／作業化)
・話す、書く、操作する、作る等の活動をバランスよく設定

38

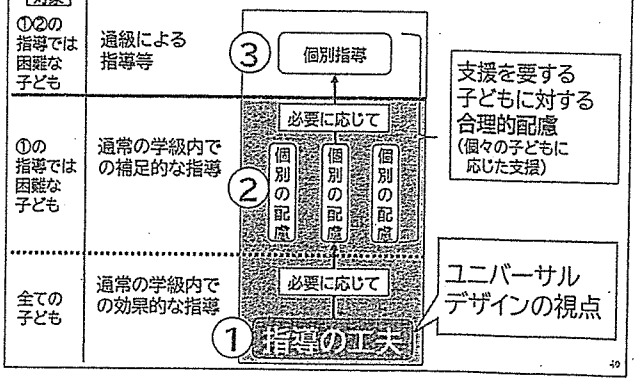
生徒を引きつける話し方

・一文一動詞で話す「教科書の7ページを開いてください」
・聞くと書く時間を区別する(同時に複数の情報処理が難しい)
・抽象語を少なくする「もうちょっと」→「10時20分まで」
・肯定的でポジティブに話す「これが終わったら昼食です」
・言葉のイメージ力を生かす「忍者のように歩こう」
・説明、指示を簡潔に伝える「3つ話します。1つ目は・・・」
・視覚情報も与える(目から8割入力　聴覚短期記憶の弱さを補う)
・語調に変化をつける(声の大きさ、抑揚、スピード、間に配慮する)
・ほめて終わる(注意や叱責が多いとトゲトゲしい雰囲気になる)
・非言語メッセージも使う(アイコンタクト等が生徒の心を揺さぶる)

39

授業にどのように取り入れるか

特別な教育的支援が必要な児童生徒に対する学習指導の段階的支援



40

ユニバーサルデザインの視点はツールの一つ

単に視覚的な教材を提示したり、共有化するために話し合い活動を取り入れたりすることが指導・支援の工夫ではありません。

視覚化することでねらいに迫るための効果的な情報提供ができたか、考えを共有することで児童生徒の理解が深まるような話し合い活動を展開できたか、児童生徒が「分かった」「できた」を実感できたかどうかを視点に手立てを検証することが大切です。

（30年度　南の要覧）

41

新高等学校学習指導要領解説

総則編　～特別な配慮を必要とする生徒への指導より～

障害のある生徒などの指導にあたっては、担任を含む全ての教師間において、個々の生徒に対する配慮等の必要性を共通理解するとともに、教師間の連携に努める必要がある。

今回の改定では、総則のほか、各教科等においても、「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」等に当該教科等の指導における障害のある生徒などに対する学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫を組織的・計画的に行うことが規定された。

42

明日からやってみたいユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業は？

43

どの子にとっても分かりやすい授業、過ごしやすい学級を

「みんな違って　みんないい」

ご清聴ありがとうございました

新高等学校学習指導要領解説

国語編
～「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」～

・比較的長い文章を書くなど、一定量の文字を書くことが困難な場合には、文字を書く負担を軽減するため、手書きだけではなく＿＿＿＿＿＿＿＿ことができるようにするなどの配慮をする
・声を出して発表することに困難がある場合や、人前で話すことへの不安を抱いている場合には、＿＿＿＿＿＿＿＿を提示したり＿＿＿＿＿＿したりして発表するなど、多様な表現方法が選択できるように工夫し、自分の考えを表すことに対すことに対する自信がもてるような配慮をする

新高等学校学習指導要領解説

数学編
～「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」～

・空間図形のもつ性質を理解することが難しい場合、＿＿＿＿＿＿＿＿などしながら、＿＿＿＿＿＿＿＿したり、＿＿＿＿＿＿＿＿などの工夫を行う

理科編
～「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」～

・実験を行う活動において、実験の手順や方法を理解することが困難である場合は、見通しがもてるよう＿＿＿＿＿＿＿＿したり、＿＿＿＿＿＿＿＿などの配慮をする

新高等学校学習指導要領解説

地理歴史編・公民編
～「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」～

・地図等の資料から必要な情報を見付け出したり、読み取ったりすることが困難な場合には、読み取りやすくするために、地図等の＿＿＿＿＿＿、＿＿＿＿＿＿して、＿＿＿＿＿＿し、視点を明確にするなどの配慮をする
・学習過程における動機付けの場面において学習上の課題を見いだすことが難しい場合・・・・＿＿＿＿＿＿＿＿
・予想を立てることが困難な場合・・・見通しがもてるようヒントになる事実を＿＿＿＿＿＿＿＿するなどの配慮をする

新高等学校学習指導要領解説

英語編
～「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」～

・英語の語には発音と綴りの関係に必ずしも規則性があるとは限らないものが多く、明確な規則にこだわって強い不安や抵抗感を抱いてしまう生徒の場合、語を書いたり発音したりすることをねらいにする活動では、＿＿＿＿＿＿＿＿などの配慮をする必要がある

新高等学校学習指導要領解説

保健体育編

～「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」～

・見えにくさのため活動に制限がある場合には、不安を軽減したり安全に実施したりすることができるよう、＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿したり、＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿したりするなどの配慮をする

・リズムやタイミングに合わせて動くことや複雑な動きをすること、ボールや用具の操作等が難しい場合には、動きを理解したり、自ら積極的に動いたりすることができるよう、動きを＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿する、＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿したりするなどの配慮をする

新高等学校学習指導要領解説

家庭編

～「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」～

・作業に見通しをもつことが難しい場合は、例えば、調理や被服製作などの完成までの＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿などの工夫が考えられる。作業を行う際には、＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿などわかりやすい指示を心がける・・・実習室等の学習環境の整備については、・・・収納場所を＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿・・・視覚的な工夫をすることも考えられる

新高等学校学習指導要領解説

商業編

～「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」～

・実習において、その手順や方法を理解することが困難である場合は、見通しがもてるよう、＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿するなどの配慮をする

情報編

～「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」～

・コンピュータ等の画面が見えにくい場合には、情報を的確に取得できるよう、文字等を拡大したり、フォントを変更したり、文字と＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿をする

・コンピュータ等の画面上の文字を目で追って読むことに困難がある場合には、どこを読んでいるのかが分かるよう、＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿をする

新高等学校学習指導要領解説

芸術(音楽)編

～「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」～

・音楽において、音楽を形づくっている要素(・・・)を知覚することが難しい場合は、要素に着目しやすくできるよう、＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿などして、＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿などの配慮をする

特別活動編

～「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」～

・学校行事における避難訓練等の参加に対し、強い不安を抱いたり戸惑ったりする場合には、見通しがもてるよう、＿＿を行うとともに、周囲の生徒に協力を依頼しておく

教職５年目研修を振り返って

国語科：教　諭　　千　田　玲　央　奈

１　研修について

（１）研修名：Ａ―１２　教職５年目研修講座（高等学校）Ⅰ、Ⅱ

（２）日　時：令和２年６月１２日（金）、９月８日（火）

（３）場　所：秋田県総合教育センター

（４）日　程：ⅰ　令和２年６月１２日（金）　１０：００～１６：１５
〈講義・演習〉教育相談と人間関係づくり
〈講義・演習〉学校組織の一員として
～マネジメントの視点～
〈講義・協議・演習〉生徒の実態を踏まえた授業改善①
ⅱ　令和２年９月８日（火）　１０：００～１６：１５
〈講義・演習〉発達障害のある生徒の理解と支援
《講義・協議・演習》生徒の実態を踏まえた授業改善②

２　感想

（１）教職５年目研修講座（高等学校）Ⅰ・・・令和２年６月１２日（金）

学校組織マネジメントの意識を高め、学習指導や学年経営、生徒指導についての実践的指導力の向上を図るという目標の下、研修に臨んだ。

午前中は二つの講義・演習があった。一つ目は教育相談と人間関係作りについてである。内容は盛り沢山であったが、その中でも人間関係作りのエクササイズは本校のパスカルタイムで実施しているものがたくさんあり、改めて本校のパスカルタイムの取り組みの素晴らしさを知ることができた。生徒間だけではなく、職員間でも大切なものであると感じた。今後も自信を持って実施していきたいと思う。二つ目は学校組織の一員として～マネジメントの視点～についてである。学校組織の一員として、教育目標を達成するためには、学校全体を見渡す、マネジメントの視点が必要になるというねらいの下、講義・演習が行われた。実際に保護者に学校の教育目標を聞かれた際にどのようにプレゼンをするか、ということでシートを作成した。そこには学校の状況や理想などを盛り込み、現状を理想に近づけるためにどのような手立てを打とうとしているかを明確に記入するものであった。コンパクトに説明するというのは難しく、要点を絞ることも大切だと感じた。学校全体の進むべき方向性が明確であるからこそ、教職員はチームとして目標を達成する喜びを感じることができ、

生徒に自信を持って踏み込んだ指導ができるのだと学んだ。

午後の研修は教科ごとに行われた。生徒の実態を踏まえた授業改善についての講義・協議・演習であった。課題別テーマとしては、「言語活動を効果的に位置付けた授業展開」「生徒の思考を深める授業展開」「問題解決のプロセスを重視した授業展開」についての工夫と実践上の課題ということであったが、その中でも私は言語活動に着目し、生徒の「資質・能力」の育成・活用につながる授業作りを目指し、Ⅱ期に向けて学習指導案を作成し、授業に臨みたいと思う。

（２）教職５年目研修講座（高等学校）Ⅱ・・・令和２年９月８日（火）

午前の講義・演習は発達障害のある生徒の理解と支援についてであった。初任者研修でも学習したことではあるが、授業だけではなくクラス経営でも大事になることでもあったため、大変参考になった。自然と発達障害という言葉だけに注目してしまい、支援はしていたかもしれないが、理解が足りていなかったと反省すべき点が講義の時に感じた。確かに支援は必要だが、障害や状況をよく考え、理解した上での支援が大切であると思う。生徒を信じて支援をあえてしないということも状況によっては必要であると感じた。また、生徒同士で問題を解決できる力はあるし、それを育んでいくのも我々のやるべきことである。演習を通して発達障害のある生徒が、どのような感じで授業に臨んでいるのかを実際に疑似体験することができた。正直、驚くことがたくさんあった。改めて理解の無さを痛感した。授業中だけではなく、クラスの生徒でも発達障害のある生徒が複数いるため、今回学んだ事を生かしていきたい。

午後は生徒の実態を踏まえた授業改善②ということで前回の続きになるものであった。自校の生徒の実態を踏まえた授業改善の実践について報告し合った。自身の成果と課題を振り返り、助言していただいたことによって気づけることがたくさんあった。また、他の先生方の授業における取り組み方なども知ることができ、同じような単元の授業を展開する上で良いヒントになると思った。授業は生徒が主役であるため、生徒の実態を踏まえて計画、実践していく必要がある。教材研究をする際、その点にも配慮しなければならない。生徒の力を伸ばすためだけではなく、合理的配慮も踏まえて今後は授業に臨んでいきたい。国語科としては、「言葉による見方・考え方を働かせる」ために何をどのように進めていけば良いのかを常に意識して準備していこうと思う。研修内容も学んで終わりではなく、学んだ事を次に生かさなければ意味がない。今回の研修が意味のあったものにするため、今後も意欲的に取り組んでいきたい。

（３）全体を通して

教職５年目は実践的指導力向上期にあたり、積極的に学年経営に参画しようとする姿勢をもち、個々の個性・適性・分掌等に応じた資質能力を向上させるという目的がある。生徒の力を伸ばすために日々、励んでいることが確実に自分自身のキャリアアップにつながることを信じて今後も精進していきたいと思う。

第１学年Ｂ組　　国語科（国語総合）学習指導案

学　校　名　　雄物川高等学校
指　導　者　　千田　玲央奈
授 業 月 日　　８月　２６日（水）３校時

１　単元名

漢文　故事『守株』　～故事成語の意味や背景を知り、漢文の表現に親しもう～

２　本時の計画（２／２）

（１）ねらい　話の内容を理解した上で要約文を作り、お互いに比較し、考えを深める。

（２）展開　　（５０分）

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入５分	・ペアで本文を読み、訓読で注意する文字を確認する。 ・本時の目標を確認する。 話のポイントをおさえた要約文を作ろう。	・正しく発音させ、読み方の決まりを確認する。 ・本時の目標を提示して、学習内容を確認させる。	
展開４０分	・現代語訳や前回の問題の解答を参考にして要約文を作る。 ・「農夫が～話」という形で統一し、７０～１００字でまとめさせる。 ・１人で考えて、まとめる。（８分）	・話のポイントだけではなく、字数も意識して取り組ませる。 ・まとめるのが困難な生徒にはキーワードに注目させる。	
	・４人グループで役割を決めて取り組ませる。（８分） ・各班が全体に発表する。 ・各班で共通するものなどをピックアップしたり、比較したりする。	・役割を明確にさせる。 ・班ごとに内容をまとめ、黒板に貼り、発表させる。 ・気づいたことなどを発表させる。	・お互いの意見をまとめて整理することができる。（A、D）
	・自分の考えに付け足すものがあれば、ノートに記入する。	・他の人の考えを踏まえた上で、自分の考えを深めさせる。	※机間指導を通してノートや発表の点検。
まとめ５分	・内容を踏まえつつ、「守株」が現在どのような意味で使われているか、まとめる。	・今回の話のポイントと「守株」の意味を理解できたことを確認する。	

評価の観点：Ａ関心・意欲・態度　Ｂ話す・聞く能力　Ｃ書く能力　Ｄ読む能力　Ｅ知識・理解

Ｉ期テーマ：言語活動を効果的に位置づけた授業展開についての工夫と実践上の課題

課　　題：Ｉ期で設定した課題と改善策について

実践的指導力向上研修講座（高等学校８年目）を振り返って

保健体育科：教諭　　宇佐美　大輔

１　研修の概要

（１）研修名：Ａ―１７　実践的指導力向上研修講座（高等学校８年目）Ⅰ、Ⅱ

（２）日　時：令和２年６月２４日（水）、９月７日（月）

（３）場　所：秋田県総合教育センター

（４）日　程：　令和２年６月２４日（水）

９：１５～１０：００	受　付
１０：００～１０：１５	挨　拶
１０：１５～１２：００	＜講義・演習＞ 不登校の未然防止と対応 細谷　林子　指導主事
１２：００～１３：００	昼食・休憩
１３：００～１４：０５	＜講義・演習＞ 学校組織の一員として －自己理解に基づく目標設定－ 加藤　昌宏　指導主事
１４：１０～１６：１５	＜講義・協議・演習＞ カリキュラム・マネジメント 小松田　哲也　指導主事

令和２年９月７日（月）

９：１５～１０：００	受　付
１０：００～１２：１０	＜協議・演習＞ 授業評価による継続的な授業改善 萩原　享　指導主事
１２：１０～１３：１０	昼食・休憩
１３：１０～１５：２０	＜協議・演習＞ 授業評価による継続的な授業改善 萩原　享　指導主事

１５：２５～１６：０５	＜協議・演習＞ 授業評価による継続的な授業改善
１６：０５～１６：１５	研修の振り返り

２　研修内容

（１）講座Ｉ期を終えて

不登校の未然防止と対策という講義では、はじめに支援に対する基本的な考え方として生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指すことが必要であり、必要に応じて関係機関が情報共有し、きめ細やかな支援策を策定する。不登校とは問題行動ではなく取り巻く環境によってはどの生徒にも起こりうることで、多様な要因・背景により結果として不登校状態になっているということを再確認した。

高校１年生での中退を防ぐためには、１学期での働きかけが大切である。また、授業がわかることは、中退の歯止めになる可能性が高い。そして、不登校の数を「新規数」と「継続数」で考えると新規数は中学校全学年で同程度出現するという現状を踏まえて、自己有用感の持たせる学級づくりや教師が安心・安全な居場所をつくることなど対策し、未然に不登校を防止できるようにする。

不登校の初期対応として、身体症状は心を映し出す鏡であり、養護教諭との情報共有をし、気付いたのなら面談や家庭訪問を通して情報共有していく必要がある。長引くようであれば医療機関に連絡するが、その場合、学校との関係が切れたと思われないように細心の注意をはかりながら対応する。

再登校にむけて、段階的な心の回復に向けたプロセスと親の対応の仕方や誘いかけの目安を活用し、保護者と連携して再登校を目指したプログラム作成に取り組む。

最後に不登校は、いったんなってしまうとそこから抜け出すことは非常に難しいので、できるだけ早期に発見して手当をし、未然防止の取り組みをする。

学校組織の一員としてという講義では、企業や自治体が活用している運営の手法の組織マネジメントの定義などを紹介していただき、学校組織マネジメントと比較し、ＰＤＣＡを活用して全ての教職員がマネジメント機能を果たす。これからの教員に求められる資質能力は自立的に学ぶ姿勢や新たな課題に対応できる力などが必要で、効果的に連携・分担し、組織的・協働的であることが求められている。

カリキュラム・マネジメントという講義の中で、テレワーク勤務などの新しい働き方では生産性が上がったというメリットや周りの進捗状況が把握しづらいといった課題があり、情報化やグローバル化など急激な社会的変化の中でも未来の創り手となるために必要な知識や力を確実に備えることができるように新しい教育課程で学校教育の良さをさらに進化させる。

（２）講義２を終えて

授業評価による継続的な授業改善を３回に分けて行った。１・２回目は他教科との協議でＦグループとして１名欠席の３名で行った。農業など普段目にすることが少ない教科を拝見し、様々な取り組みを見て参考になった。私の授業の成果として目標の数値化やホワイトボードを活用しての可視化が上げられた。逆に課題としてＩＣＴの活用やポイントの可視化が上げられ有意義な時間となった。

３回目は保健体育科として行い、萩原享指導主事の下、課題に対する改善策をみつけるや実践的指導力とは何か、イメージをつかむのが目標であった。まず、生徒たちが望む授業として、①楽しい授業、②上手になる（できる・わかる）授業が求められている。そして、ねらいを明確化することで、生徒がどうなればよいか明確にする。そのために、ねらいと評価を一体化し、ねらいから評価までの整合性のある学習活動にしたい。

実践的指導力とは、どんな生徒になってほしいのか①授業観を持つこと、教えたい内容など②教材研究力を鍛えること、個に応じた指導ができる力など③学習指導力を鍛えること、包容力や安心感など教師自身が④豊かな人間性を持つことが上げられた。そして、今後は中堅教員としての自覚を持ち、積極的に学校経営に参画するとともに、分掌等に必要な役割・職務に関して理解を深め、組織マネジメント能力を身につけられるようにしていきたい。

（３）全体を通して

今回の研修Ⅰ・Ⅱを通して、担任をやっていく中で生徒を理解することや不登校を未然に防ぐことと対応は本校にとって重要な講義だったと思っている。今後のクラス運営に生かして社会でも通用する生徒になれるよう手助けをしていきたい。

また、学校組織の一員としてより良い学校づくりが出来るよう校務分掌の役割に責任を持っていきたい。最後に、今後の教科指導として本時のねらい、目標の設定の仕方において前時の振り返り等を基にした質問や発問を通して、生徒が学習の流れを見通すことができるようにすることや習得した知識や技能を活用したり応用したりできるよう、話し合い活動や振り返りの視点、目的を明確に示すことを考えて授業を進めていきたい。

そのほかに、個人として回数や数値の「基準」ではなく様子や姿の「規準」で評価することやポイントの可視化や制限などを付けて比べさせることで理解させることなど今後の授業に生かしていき、生徒達ができたという成功体験やおもしろいと思えるように工夫していきたい。

第１学年Ｂ組　保健体育科（体育）学習指導案

日　時：令和２年７月２日（木）３校時
場　所：本校　体育館
指導者：宇佐美　大輔

１　単　元　名　球技　ネット型　「バレーボール」

２　単元の目標
・学習に主体的に取り組み、仲間と協力しながらバレーボールの楽しさや喜びを共有することができる。（関心・意欲・態度）
・自己の課題を見つけ出し、解決のための工夫や手立てを考えることができる。（思考・判断）
・オーバーハンドサーブを適切な打ち方で打つ事ができる。（技能）
・バレーボールの特性や技術、課題解決のための方法を理解できる。（知識・理解）

３　単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	技能	知識・理解
主体的に学習に取り組み、仲間と協力しながら作戦などの話合いに貢献しようとしている。また、安全や健康を確保しながら仲間と互いに教え合おうとしている。	自らの課題を見つけ、改善するための手立てや練習を考え、実践する事ができる。また、同じグループの仲間に対して、技術的な課題や有効な練習方法の選択について指摘できる。	空いた場所をめぐる攻防を展開するためのボール操作や安定した用具の操作ができる。	今まで学んだ技術の名称や行い方について、学習した具体例を挙げている。

４　本時の計画
（１）ねらい　　オーバーハンドサーブ（フローターサーブ）を入れることができる
（２）展　開

過　程	学　習　活　動	指　導　上　の　留　意　点	評価方法
導　入 １０分	１．挨拶・出欠確認 健康観察 ２．準備体操		
展　開 ３５分	３．本時の学習課題の確認 ４．ウォーミングアップ ①アンダーハンドパス （回数） ②オーバーハンドパス （回数） ５．フローターサーブの確認 ６．フローターサーブ練習 ７．振り返り	・見通しをもって学習できるように、授業の流れを確認する。 ・基本となるオーバーハンドパスやアンダーハンドパスを継続してできるように指導する。 ・正しいフォームを指導し、全員に共通理解させる。 ・１０分の中で最低３回相手コートに入れることができる。 ・フォームだけでなく、なにを意識したらサーブが入ったか振り返らせる。	【思考・判断】 自らの課題を発見し、改善のために次回から何をすべきかを書き表している。 （学習カード）
まとめ ５分	８．本時のまとめ	・本時のねらいが達成できたか確認する。	

実践的指導力向上研修講座（高等学校８年目）を振り返って

保健体育科　能美　カンナ

【研修の目標】

自己理解に基づき、個々の個性・適性、分掌等に応じた資質能力の向上を図る。

○実践的指導力向上研修講座（高等学校８年目）Ⅰ

日時：令和２年６月２４日（水）　　場所：秋田県総合教育センター

①不登校の未然防止と対応＜講義・演習＞10:15～12:00

はじめに：支援に対する基本的な考え方

・児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す

・必要に応じて関係機関が情報共有し、きめ細やかな支援策を策定すること

・不登校の定義、不登校≠問題行動

（不登校児童生徒への支援の在り方について（平成２８年９月文部科学省））

１：不登校の現状

・「高校中退調査報告書」より、高１での中退を防止するためには、１学期の働き掛けが大切。また、授業がわかること（わからないと面白くない）は、中退の歯止めになる可能性が高い。

・不登校の数を「新規数」と「継続数」で考える。新規数は中学校の全学年で同程度に出現する。

２：未然防止

・自己有用感を持たせる学級づくり

・勇気づけの授業

・「ほめる」と「勇気づける」の違い

・教師が「居場所づくり」を、生徒が「絆づくり」を

３：初期対応（早期発見・早期対応）

・早期発見のための「予見」、情報の「管理」「引継ぎ」「共有」

・養護教諭との「情報共有」

・変化に気付いたら、１面談、２電話連絡、３家庭訪問、４情報共有

・不登校の「３つ（学校に行かない、学校に行けない、気力がない）のタイプ」を踏まえた対応

・アセスメントシートの活用

・いじめにより当該学校に在籍する児童生徒相当の期間学校を欠席することを余儀なくされている疑いがあると認められるとき⇒いじめの「重大事態」として対応

・医療機関に連絡する場合、欠席が長引いた場合⇒学校の関係が切れたと思われないように細心の注意をする

・適切な時期に適切な情報提供をする

４：再登校に向けて

・段階的な心の回復のプロセスと親の対応

・誘いかけの目安や再登校を目指したプログラム作成を活用

・学校側の受け入れ準備や担任をサポートする学校全体の支援体制、連携の重要性

おわりに：不登校はできるだけ早期に発見して、手当をする未然ぼうしの取組をする

②学校の組織の一員として－自己理解に基づく目標設定－＜講義・演習＞13:00～14:05

ねらい：教職員としての自分の力量分析に基づいた能力開発の必要性について理解する。

＜講義＞

・組織マネジメント：企業や自治体が活用している組織運営の手法
・組織マネジメントの定義
・組織マネジメントと学校組織マネジメント
・学校組織マネジメントの資源と方法
・これからの教員に求められる資質能力

＜演習＞自分の資質能力の分析

（１）　資質・力量シールの作成：７つある領域の中から自分の職種にとって大切であると思う資質・力量１～２つ挙げ、１枚の付箋に１つずつ記入する。
（２）　情報交換
（３）　資質・力量マップの作成
（４）　自己理解に基づく目標設定
（５）　まとめ

③カリキュラム・マネジメント＜講義・演習＞14:15～16:15

・新しい働き方（テレワーク）のメリットや課題について
・グローバル化による世界経済の成長
・グローバル化によるサービス業の国家間・地域間での大きな生産性格差
・国として目指している方向（実践力、思考力、基礎力）
・学習指導要領改訂の視点⇒新しい時代に必要となる資質・能力の育成
・育成すべき資質・能力の三つの柱⇒何ができるようになるか、何を学ぶか、どのように学ぶか
（学びに向かう力・人間性等の涵養、知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成）
・これからの教育課程の理念
・カリキュラム・マネジメントの必要性
・アクティブ・ラーニングとカリキュラム・マネジメントをつなぐ（由利本荘市立西目小学校の取組）
・カリキュラム・マネジメントー教育課程を軸とした学校教育の改善・充実ー（2018 中央説明会から）
・勤務校の「よさ」と「課題」をさぐる（先生達、こどもたちそれぞれ）

○実践的指導力向上研修講座（高等学校８年目）Ⅱ期

日時：令和２年９月７日（月）　　場所：秋田県総合教育センター

①　授業評価による継続的な授業改善＜協議・演習＞ーグループ別授業分析ー10:00～12:10、13:10～15:20

・Ｂグループ（4 人）：授業提示 25～30 分（展開部分）、協議 20 分
・協議の視点「ねらい（目標）を達成するための手立ては有効であったか」

（協議内容）

＊成果

○先生の例を提示
○生徒への躾（礼儀、規範意識）
○生徒の考えを深めるための例や発問

＊課題

●話を簡潔にする、ゆっくり話す
●意見発表、交換の場の提供

●字のフォント

② 授業評価による継続的な授業改善＜協議・演習＞各教科

【研修の目標】

・視点に沿った協議を通して互いの成果と課題を明らかにし、課題に対する改善策を見付ける。

・教科指導における実践的指導力とは何か、イメージをつかむ。

＜協議より＞

・生徒たちが望む授業

１：楽しい授業

２：上手になる（できる、わかる）授業 ⇒ （生徒が）どうなればよいか明確にする＝ねらいの明確化

・ねらいの明確化⇒授業の前後で生徒にどのような変容が見られるか…で考える。

・ねらいと評価（規準）の一体化

⇒ねらいから評価までの整合性、ねらいに迫るために最も効果的な指導方法・教材を選定

・「実践的指導力」とは

１：授業感を持つこと

２：教材研究力を鍛えること

３：学習指導力（指導と評価を行う力）を鍛えること

４：豊かな人間性を持つこと

・その他考えて欲しいこと－共通の部分－

◎本時のねらい、目標設定の仕方

◎学習プリントを「穴埋め式にすること」

◎「振り返り」なのか「感想」なのか

◎「留意点（支援）」なのか「覚え書き」なのか

・その他考えて欲しいこと－個別（能美）－

◎学習指導案に使われる文言の整理

◎生徒の「思考をアクティブに」する手立て

◎学習活動の吟味

○実践的指導力向上研修講座（高等学校８年目）を終えて

今回の研修は「実践的指導力」が軸となる内容であった。採用から８年目となる今年度であるが、今までは自分の力量向上のための研修が多かったが、今後はそれに加えて「若手教員の指導力向上」ということにも目を向けながら研鑽を積む必要があることを実感できた。また、教育の指針より、採用８年目の「中堅教員」としての自覚を持ち、積極的に学校経営に参画したり、組織マネジメント能力を身に付けたりしていかなければならない。そのための基礎的な内容を今回の研修で学ぶことができた。

Ⅰ期の研修では、特に学校組織の一員として自分の資質能力が現在勤務する学校においてどのように活用できるのかということを分析した。また、今後どのような資質能力があると更に教員としての力量が高まるかということも発見できた。現在の私に不足している力として、好奇心や発信力、情報分析などが挙げられた。今後の生活の中で自らが考える「教員にとって学校の一員として必要な資質能力」が身に付くよう、視野を広げて意欲的に業務に励みたい。

Ⅱ期の研修は授業改善についての内容であった。それぞれ他教科の先生方と３～４人グループで協議・演習を行った。私は国語、数学、土木の先生方と同グループだった。今回の研修は前回の５年研よりもより授業内容や先生方の指導の工夫が見られ、非常に参考になった。例えば、生徒が発表する場面においてその順

番を工夫することや、教師側からのヒントや発問の出し方など、本当に細かい部分ではあるが、丁寧に取り組むことで、より生徒の思考を深めたり、意欲を高めることに繋がったりするということが分かり、今後の自分の授業においても積極的に活用していこうと思う。また、グループ協議の後は各教科に別れての研修となった。指導主事の萩原先生より、実戦的指導力についての講義と、共通したもの及び各個人の今回の授業に関する指導をして頂いた。その中で今後の自分の課題となる「生徒の「思考をアクティブに」する手立て」である。必ずしもグループ活動やペア活動のような形態をとらずとも生徒の思考を活発にすることができるというアドバイスを頂いたので、そのための手立て、方法を考えていかなければならない。このようなことを今このコロナ禍であることを逆手に取り、個の思考を深め、それをまた工夫した手立てを用いて集団で共有や知識の繋ぎ合わせに繋げていけるように、今後今以上の研鑽を積んでいきたい。

２回の研修を通して、年齢を重ねて行く分自身の立場や能力を見つめ直し、常に最善策を考えながら学校運営や授業に向かわなければならないということを認識させられた。人任せにせず、どの方法がよりより学校作りや生徒を育てることに繋がるかを考えつつ、様々なものの見方をしながら自分の資質能力向上を目指したい。

その内容を他の学校の教員と情報共有すること

まずⅠ期では、生徒理解について学んだ。本校は学年の半分程度が同じ中学校であるということもあり、大きく人間関係が崩れることはないが、より関係を良好にすることを考えると、その他の中学校の生徒との関わりを入学段階からよく観察及び指導していく必要があると考える。そういう点から、本校独自の「パスカルタイム」はやはり重要であり、研修でも本校の取組が取り上げられた。今後は学級減となっていくが、少ないからこそ、教師側が生徒についてより理解を深め、お互い良好な関係の中での指導を目指したい。その後は学校マネジメントについて、実際に学校要覧を使用して、「保護者へ学校のプレゼンを行うとしたら」ということでプレゼンテーションを作成した。また、午後からの授業改善の協議・演習では、各自に与えられたテーマでの自校の生徒の実態に応じた授業での課題とその改善策を同じ教科３人で考えた。そこでは各校のそれぞれの取組の工夫や、具体的な課題が明確となり、意見も活発に出しあうことで改善策が明確になった。この協議では、学校の実態も考えると、生徒のことを第一に考えたとしても教材や道具に限界があるので、無い物ねだりをするのではなく、ある資源を有効に活用するという事をしていくべきだと感じた。

Ⅱ期では、教師のカウンセリング技法について学ぶことが出来た。短時間でも、なるべく生徒と話をする機会を作り、より生徒理解を深めることが大切であり、そのためにも教師側の生徒への関わり方というが重要であることを再認識すると共に、生徒の見えない部分での問題などが明確化するための手法を知ることができた。多様な生徒に対しては、皆同じような指導や傾聴はできない。教師側の多様な手法を用いて、どの生徒にも平等且つ場合に応じた対応をしたい。午後は、他教科の先生方とⅠ期で出た改善策を実践した授業の DVD を観ながらそれぞれの成果と課題について協議した。他教科の先生方の授業では、生徒の興味を引く教材や授業展開の工夫がとても素晴らしく、今後自分の授業でも取り入れたい内容だった。私自身の授業の振り返りとしては、課題の点でもあった通り、各グループで上げられた課題点等を全体に共有するという機会を設けることが出来なかったことである。また、生徒達自身で練習内容を決めていく際に、もう少し時間をかけて課題解決から「出来る」という生徒の数を増やせれば良かったと感じている。現在はこの研修を生かし、生徒の主体性を考え、全てを教師側から指導することなく、生徒達に「どういう動きをしたいか」等を聞きながら授業を進めるようにしている。できるだけ生徒達が自分の動きがどうなっているのか客観的に考え、動きを改善していくための活動が出来るような授業展開にし、授業を通して充実感や達成感、協調性をより高めることが出来るように授業のための準備や生徒への対応を丁寧且つ密に行っていきたい。

第１学年Ａ組　保健体育科（保健）学習指導案

令和２年６月３０日（火曜日）５校時
場　所：１年A組教室
指導者：能美　カンナ

１　単　元　名　現代社会と健康　　ア　健康の考え方　（イ）「健康の考え方と成り立ち」

２　単元の目標　健康についての基本的な考え方やとらえ方と、健康の成り立ちに関わる要因を理解し、自らの健康観について書き表すことができる。

３　単元と生徒　生徒観：部活動への加入率が高く、積極的に学校生活を送っている生徒が多いため、保健の授業にも意欲を持って参加している。現在は新型コロナウイルスの影響もあり、グループ活動やペア学習を積極的に行っておらず、生徒同士での意見交換の場が設定できない状態である。その中で、教師側からの発問や質問に対して積極的に発言してくれる生徒もおり、その答えや考えを全員で共有することで自己の知識を増やすことに繋がっている。

教材観：現在、新型コロナウイルス及び新型肺炎が蔓延しており、身体的な健康のみならず、精神的な健康も損なわれつつある状況である。よって、昨今問題視されている「心の健康問題」が大きな社会影響を及ぼしている。そんな状況下で、より健康に生活していくためには、自己の健康観が生活の軸となっていくと考えた。そのため、WHO 憲章から現在までの健康観の変化を知識として、それを活用しながら自己の健康観について考え、それを実現できるような生活をイメージさせたい。

指導観：WHO 憲章から現在まで、どのような経緯で健康観が変化してきたのかを理解させる。その際、憲章の内容と自分の状態をイメージしやすいように具体的な事例を出していくようにする。また、それらに加え健康の成立要因も具体例を出しながら理解させることで知識を深めさせる。その後授業で学んだ全ての語句や文章を活用し、自己の健康の定義を考え、書き表せるようにする。

４　指導と評価の計画

現代社会と健康（35 時間）
ア　健康の考え方（6 時間）
　（イ）健康の考え方と成り立ち…1 時間（本時）
イ　健康の保持増進と疾病の予防（8 時間）
ウ　精神の健康（8 時間）
エ　交通安全（6 時間）
オ　応急手当（7 時間）

○　単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	知識・理解
健康の考え方と成り立ちについて、資料を探したり、見たり、読んだりするなどの学習活動に意欲的に取り組もうとしている。	健康の考え方と成り立ちについて、資料等で調べたことを基に、課題を見つけたり整理したりするなどして、それらについて説明している。	健康の考え方は、国民の健康水準や疾病構造の変化に伴って変わってきていること、また健康は様々な要因の影響を受けながら、主体と環境の相互作用に成り立っていることについて理解したことを記述している。

5　本時の計画

（1）ねらい　　自分の「健康の定義」をつくることができる。

（2）展　開

過　程	学　習　活　動	指　導　上　の　留　意　点	評価方法
導　入 5分	・挨拶・出欠確認 ・本時の学習内容、目標の確認	・目標を提示する。	
展　開 ３５分	・「健康」について考える。	・今現在の自己の健康について考えさせ、プリントに書き出させる。	
	・WHO 憲章ついて学ぶ。	・今の自分が WHO 憲章に当てはまるかどうか聞いてみる。 ・パラリンピック選手の写真を使って、WHO 憲章について考えさせてみる。	
	・現在の健康のとらえ方について学ぶ。	・現在、健康のとらえ方や考え方は、生活の質や生きがいが重視されるということを例を挙げながら理解させる。 ・健康は、身体的、精神的、社会的側面がそれぞれ互いに関連していることを理解させ、例を挙げプリントに書かせる。	
	・健康の成り立ちについて学ぶ。	・健康に関わる要因（主体、環境）それぞれについて理解させる。	
	・自分の「健康の定義」を考え、書き表す。	・この時間に学んできた内容から、自分の健康に必要な条件に近い語句を抜き出してプリントに書かせる。 ・抜き出した語句を組み合わせて文章化し、自分の「健康の定義」を作成させる。	【思考・判断】 健康についての知識を繋ぎ合わせ、自己の健康の定義について考え、書き出している。 （プリント）
	・自分の「健康の定義」が今後どのような生活をすると実行できるかを考え、書き表す。	・今後どのような生活を心掛けると自分の「健康の定義」を守っていけるか考え、具体的な行動をプリントに記入させる。	
まとめ 5分	・次時の授業説明	・次時の説明をし、プリントを回収する。	

高等学校中堅教諭等資質向上研修を終えて

家庭科　　小松　久子

1　研修について

（1）　秋田県公立高等学校中堅教諭等資質向上研修校長等連絡協議会（令和２年４月１５日(水)）

①研修の意義について（高校教育課・伊藤指導主事）

・本研修は、ミドルリーダーとして他の教員へ助言・支援する指導の中心的存在となるための研修である。

・初任研とは異なり、自ら企画・立案する中堅研を通して、自己を見直してほしい。また、主体的に取り組み、得意を伸ばし、苦手を克服してほしい。

②研修の概要について１（高校教育課・伊藤指導主事）

・中堅研研修員は、秋田県教員育成指標の第３ステージにあたる。求められる資質を自覚した積極的な行動をし、組織マネジメント能力を身に付けること。また、教育法規に基づいた意見・取り組みが必要になるので、管理職からの指導が必須である。

③研修の概要について２（総合教育センター・加藤指導主事）

・アクティブラーニング型の演習を交えた研修を行い、研修員の教育活動での実践に結びつけられるようにする。

・携行品や欠席・遅刻時の対処、コロナウィルス対策等、留意すること。

④その他、研修に関する諸連絡

（2）中堅教諭等資質向上研修講座Ⅰ（令和２年６月２３日(火)）

①中堅教諭等への期待（秋田県総合教育センター・難波文彦所長）

・学校組織として機能するよう、組織全体を視野に入れて仕事をしてほしい。

・管理職への提言や若手教員への助言を積極的にしてほしい。

・さらに視野を広げ、社会の動きや課題にも意識を向けてほしい。

・教師としての力量が高まっても、あくまでも謙虚であってほしい。

②講義　質の高い授業研究を継続的に進めていくための方略（秋田大学・阿部昇特別教授）

・知識偏重型の授業では対応しきれない社会になる中、新たな見方・考え方が必要になってくるため、授業で培わなければならない。

・教師が「教材研究力」「目標設定力」「授業構築力」を深めないと、生徒が「主体的・対話的で深い学び」をすることができない。

・一人で深い授業をつくることには限界があり、実質化された授業の共同研究システムをつくることが重要である。

③講義・演習　学校の危機管理　（秋田県総合教育センター・鈴木雅之教育専門監）

・危機管理は、想像と準備が重要である。リスクはどこにでもあり、絶対になくならないと認識するべきである。

・一人で危機に対応することはできないため、職員一人ひとりが当事者意識をもって組織で対応しなければならない。

・危機や問題には必ず前兆や予兆があると心得、アンテナを高く張っておく。

・学校の危機管理マニュアルは、読んで中身を理解してこそ意味がある。

・危機が起きたことで非難されるのではなく、起きたことにどのように対応したかによって非難される。そのため、初期対応が重要である。

・リーダーシップとは、置かれた状況で何ができるかを考え、行動することである。
・リーダーシップの形態は様々あるが、自分はどのような場面でリーダーシップを発揮できるのか分析する必要がある。
・リーダーシップには目標の設定・共有と率先垂範が重要な要素である。

（３）中堅教諭等資質向上研修講座Ⅲ　（令和２年８月２６日(水)）

①講義・演習　いじめの理解と対応（秋田県総合教育センター・伊藤努指導主事）

・中堅職員は、個人の生徒対応だけでなく、生徒の課題に対する指導・支援に係る校内組織等のマネジメントができるようになることが必要である。
・チーム学校としての組織的な支援と保護者や関係機関、地域との連携を推進していかなければならない。
・今一度、いじめの定義・概念を確認する。いじめ防止対策推進法では、いじめが起きていると思われるときは適切かつ迅速に対処するとある。様子見などすぐに対処しないのは非常に危険である。
・いじめの認知数は増えており、意識の高まりが見られるが、地域間や学校間で格差があるのも現状である。
・学校・保護者間や教師間でいじめの認識の違いがあると対応が困難になるので、共通理解を図っておかなければならない。いまだに法律上のいじめと社会通念上のいじめの概念にギャップがあるので、それを埋める必要がある。
・教員間での情報の共有は絶対である。
・「いじり」が「いじめ」につながるケースがある。遊びやふざけか否か、相互性の有無に注目し、見極めなければならない。
・教師から生徒のいじりは、人間関係ができているからと安心しない。それを見ている周囲の生徒に伝染してしまう危険性がある。

②講義・演習　気になる生徒の事例を通した具体的対応の理解（秋田県総合教育センター・小野寺祐指導主事）

・自身の「認知」、すなわち考え方のクセを意識する
・問題行動は、所属欲求を満たすための手段だが、それ自体が目的となる。
・生徒の適切な行動に注目し、適切な場面で目立たせる。また、普通の行動に濃く関わることで適切な行動が増え、不適切な行動が減る。
・発達障害の子どもの場合、対応の仕方によって二次的な問題を引き起こすことがある。
・問題が起こることは必ず一つの原因があると考える「直線的思考」ではなく、あれもこれも原因の一つかもしれないと複数の仮説を立ててみる「円環的思考」で検討する。

（４）中堅教諭等資質向上研修　授業研修　（令和２年９月４日(金) 秋田県立金足農業高等学校）

①１班授業実践（２・３班授業参観）　単元名：装う　人の一生と被服
②２班授業実践（１・３班授業参観）　単元名：食べる　食生活の安全のために
③３班授業実践（１・２班授業参観）
単元名：食べる　食生活の安全のために　（45ページ指導案）

④協議

・中学校での既習事項の復習のみにならないように注意する。そのためにも、中学校の学習指導要領にも目を通しておくべきである。
・様々な視点からの生徒の気付きを大切にする。衣服分野の学習であっても、　環境や消費者教育など他の単元とつなげて考えさせる必要がある。

・様々な視点からの生徒の気付きを大切にする。衣服分野の学習であっても、　環境や消費者教育など他の単元とつなげて考えさせる必要がある。
・学習前と学習後での生徒の変容により、思考の深まりを見て取ることができる。また、それを評価につなげるとよい。
・本研修の目的は、生徒の実態に合わせた授業改善ができるようになることである。生徒の姿をよく見て、手立てを工夫してほしい。
・新しい生活様式を念頭において授業計画・実践を行ってほしい。新型コロナにより、家庭科の学習が生活に活かされると見直されている。やれることを工夫して実践していくこと。

（５）中堅教諭等資質向上研修講座　Ⅳ期　（令和２年１０月１５日(木)）

①講義・協議　教育活動全体を通じたキャリア教育（秋田県総合教育センター・稲岡寛指導主事）
・秋田県の学校教育の指針では、「地域に根ざしたキャリア教育の充実」を掲げている。
・社会の中で自分の役割を果たしながら自分らしい生き方を実現していく過程を「キャリア発達」という。キャリア発達を促すには、今学んでいることが　人生の中でどのように活かされるのかを考えなければならない。
・社会人・職業人として自立して時代の変化に柔軟に対応していく力を身に付けることをより重視し、今後は校種間を貫いた指導が重要になる。
・教科横断的な指導は、教科相互の関係を知ることができ、理解が深まる。

②講義・演習　学校全体で取り組む情報教育（秋田県総合教育センター・伊藤康夫指導主事）
・「情報活用能力」「言語能力」「問題発見解決能力」は全ての学習の基盤として育まれ活用される力である。
・ＩＣＴ活用の目的は、分かる授業を実践し、生徒の学習への理解を深めたり興味・関心を高めることである。効果的な授業経営が可能になるが、従来の授業を否定するものではなく、また、授業の完全ＩＣＴ化を進めるものでもない。
・今後、情報モラル教育はますます重要になる。生徒・保護者・教員の三者での共通理解を図っておかなければならない。

③講義・協議・演習　人間としての在り方生き方を考える道徳教育（秋田県総合教育センター・加藤昌宏指導主事）
・生徒一人ひとりに判断基準をもたせることが大切である。
・道徳教育は高等学校においても計画的・組織的な指導が必要で、教師個人の指導だけでは対応できない。
・社会人講話などでは、生徒の考えを共有する機会を設定し、多面的・多角的に考えさせ、心の成長に結びつける。

※講座Ⅱ期・Ⅴ期は、新型コロナ感染拡大予防及び天候不良のため自校研修に変更

（６）選択研修について

①研修先　日用雑貨ミンカ（大仙市大曲）
②日　時　令和２年８月７日（金）～令和２年８月９日（日）　９：３０～１７：３０
③概　要　開店準備・商品包装・商品陳列・在庫管理・POP 製作・接客及び販売
通常の販売に加えて８月８日（土）は菓子販売があったため、その準備作業を行った。
全体的に、お客様と対面して販売するよりも、販売に伴う準備作業を中心に取り組ませていただいた。

（7）特定課題研究について

①テーマ　　主体的・対話的な深い学びにつなげる授業改善
　　-ユニバーサルデザインの視点を取り入れながら-

②研究の概要

ア）研究テーマの選択理由

新学習指導要領にも示されているように、変化の著しい社会に対応できる生徒を育てるため、我々教師は探究型の質の高い授業を実践できるようにしていく必要がある。授業改善は日々行っていることではあるが、生徒が学習内容を理解していなかったり、学びを他の学習につなげられなかったりということが多々ある。次時の学習や評価などでそのことを知るわけだが、そのような時に授業を振り返ってみると、私自身が一方的に話して授業が終わっていることが多い。生徒にとって「わかる」授業を行うためにも、生徒の思考を深められるような手立てを考察し実践したいと考え、このテーマを設定した。また、多様な生徒の実態にも合わせた授業づくり、すなわちユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりは本校全体の課題でもあり、その点も取り入れた実践も行いたいと考えた。

イ）「家庭総合」での授業実践

主体的な学びを深めるために、本時の目標やポイント・学習内容・学習の流れ・活動手順等を視覚的に提示することやペアやグループ学習等、生徒が自分の意見や考えを筋道を立てて発言し、互いの考えを伝え合って理解を深める機会をつくること等が本校の取り組みとして掲げられている。

それらを踏まえ、また、校長先生の講話やその時に紹介いただいた「Akitaractive Eye」（秋田県総合教育センター）を活用し、以下の３点を掲げて実践することとした。

1　本時の目標を明示し、学習の見通しをもてるようにする。
2　ペアやグループで自分の考えを共有する機会をつくり、多様な視点から考えを深められるようにする。
3　実習では視覚的に理解できる資料を提示する。また、習熟度を考慮した小グループ学習を行い、知識・技術の定着を図る。

本報告では、以下に３つの授業実践について挙げる。

■１年家庭総合　衣生活　被服の手入れと保管（しみ抜き実験）

４種類のしみを３つの方法でしみ抜きを行う実験をした。グループに分かれて予測→実験→考察を行ったが、本授業での実験・実習の経験がほとんどない段階だったため、１クラス目では準備・片付けに時間がかかり、考察の時間を十分にとることができなかった。そのため、２クラス目では準備物・手順等をホワイトボードに細かく提示するとともに、準備時間を２段階に分けて設定したことでスムーズに準備・実験を行うことができ、考察の時間を十分に設定し理解につなげることができたと考える。しかしながら、実生活の活用に結びつけた考察が不十分であったため、実験結果を　フィードバックし、学びを深める工夫が必要であった。

■１年家庭総合　衣生活　被服の構成と製作・手縫いの基礎

被服実習では、生徒の意欲と技術の差が大きいため、本時の到達目標を明示するだけでなく、理解力・技術力の高い生徒への配慮として、「次の工程及びゴールの明示」「ミニティーチャーの指名」　を行った。実習では、教師が生徒全員に技術指導を直接行うことは難しいため、

他の生徒の理解を深め、技術を身に付けさせるために大変有効であった。ミニティーチャーの生徒についても、他者に教えることで、技術の定着や説明する力の伸長が見られる生徒もいた。

また、これまでは裁縫の基礎を掲載した資料を配布するとともに、縫い方の様子が分かるように模造紙と毛糸で製作した拡大模型を提示していた。しかし、手元にある実物と異なるため、理解が難しい生徒も少なくない。そこで、基礎縫いに関する動画（埼玉大学川端研究室）を活用し、視覚的　に分かりやすい提示を工夫した。動画の提示により針の動きが理解しやすい生徒もいたが、生徒によっては拡大模型のように動きがないものの方がよかったり、教師の模範提示でなければ理解できない生徒もいたりし、生徒の実態に合わせた複数の手立てが必要であった。

■２年家庭総合　保育　子育て支援と地域の交流

子育てに関連した３つの事例についてペアに分かれてケーススタディを行った。「〇〇家のピンチにアドバイスをしよう」という形で課題を提示することで、生徒が取り組みやすいよう工夫た。また、横手市の子育て支援制度・サービスを資料提示するとともに、少子化を考える高等学校家庭科副読本「考えようライフプランと地域の未来」（秋田県・秋田県教育委員会）を活用し、考える視点を広げられるようにした。本時では、ワークシートに自己の意見しか記入することができなかったため、他者の意見も整理できるようなスペースを設けたり、思考の流れが分かる構成にしたりするなど、ワークシートの工夫が必要であった。

③成果と課題

今年度２回実施した授業改善アンケートの結果を見てみると、アンケート項目Ｃ-５「自分の考えを深める時間が確保されている」Ｃ－６「生徒間や先生と意見や考えを聞き合える時間がよくある」では、ほとんど変化が見られなかった。（下表Ｃ項目）

1A 家庭総合		1回目	2回目
A	授業の仕方	3.7	3.8
B	授業規律	3.8	3.8
C	研究主題	3.7	3.9
D	学力向上	3.5	3.8

1B 家庭総合		1回目	2回目
A	授業の仕方	3.7	3.8
B	授業規律	3.7	3.7
C	研究主題	3.6	3.6
D	学力向上	3.6	3.4

2A 家庭総合		1回目	2回目
A	授業の仕方	3.9	3.8
B	授業規律	3.8	3.8
C	研究主題	3.8	3.8
D	学力向上	3.8	3.8

2B 家庭総合		1回目	2回目
A	授業の仕方	3.9	3.9
B	授業規律	3.9	4.0
C	研究主題	3.9	3.9
D	学力向上	3.9	3.9

授業での生徒観察やワークシートなどを振り返ると、自分で考えを深めたり広げたりできた生徒もいると感じるが、生徒の実感としては考える時間や方法が不十分であるため、今後も教材研究を深め、授業改善していかなければならない。研究授業の際には他教科の先生から、ペア学習やグループ学習では意見の言えない生徒にとっては底上げになるが、上位の生徒にとってみると、ある程度の知識だけで完結してしまうというお話があった。上位層の生徒の力も引き上げることができるような手立てを工夫していきたい。また、家庭科では学習したことを実生活で活用することも目標の１つである。生徒が学習内容を現在あるいは将来の生活で実践できるよう題材や声かけを工夫する必要がある。

加えて、授業のユニバーサルデザイン化への取り組みも研究する中で、生徒によって理解しやすい道すじが違うため、複数の手立てを準備しておかなければならないと感じた。また、指先の力加減や

空間の認識などが難しい生徒もおり、授業の構成や指導方法の工夫だけでなく専門的な支援も必要であると言える。

特定課題研究を進めるにあたり、校長先生より、授業改善は永遠のテーマであり、生徒の実態によってアプローチの方法は変わるため、よく見定めなければならないというお話をいただいた。生徒の興味関心や思いをキャッチアップして教材を工夫する必要があるだろう。さらに、家庭科は生活に密着している教科である。社会科や保健体育科などと連携することで、内容の充実が図られるのではないかというご助言もいただき、教科横断的な授業の展開も今後考えていきたい。また、学校・生徒の実態をよく見極めて課題を設定し、解決していく必要があることを確認することができた。今後はミドルリーダーとしての役割を自覚し、資質を高めていけるよう研鑽を積んでいきたい。

２　研修を終えて

研修を振り返って、特に印象深く考えさせられたのは、教科指導に関する内容である。講座Ｉでの講話では、教師の基本は授業であることを改めて自覚した。教師が「教材研究力」「目標設定力」「授業構築力」を深めないと、生徒が「主体的・対話的で深い学び」をすることができないが、一人で深い授業をつくることには限界がある。そのため、実質化された授業の共同研究システムをつくることが重要であるということを理解した。まずは、教科内だけに囚われず、他教科と連携しながら授業づくりをすすめていきたい。そして、変化の著しい社会に対応できる生徒を育てるために、探究型の質の高い授業を実践できるようにしていきたいと考える。

Ⅳ期の講座では、ＩＣＴ活用について理解を深めた。その目的は、分かる授業を実践し、生徒の学習への理解を深めたり興味・関心を高めることであり、効果的な授業経営が可能になる。本県においては、「e-AKITA　ICT 学び推進プラン」が実践されていくわけだが、自身の ICT 活用指導力を高められるよう主体的に関わっていかなければならないと強く感じた。上記の授業づくりとも関連し、質の高い効果的な授業実践のためにも ICT 活用についての研鑽を積んでいきたい。

危機管理の講座では、これまで学校で起こる事故・事件に対して「特別なこと」という意識が私自身にあったと痛感した。災害や感染症、いじめ等に対して、どんな些細なことも軽微なものと考えずに迅速に対応し、重大な問題になるような事態を防いでいきたい。今後は、多様な事案に柔軟に対応することが教師に求められている。今後、危機的状況にも対応できるリーダーとなれるよう、事故は「必ず起きること」と常に当事者意識をもち予防に努めるとともに、置かれた状況で何ができるかを考えて行動し、柔軟な対応力を身に付けていきたい。

また、選択研修では、小売店の仕入れから販売までの一連の流れ、宣伝活動を含む販売手法の工夫、販売に伴う事務的作業等、単にこれらを理解するだけでなく、自分自身の仕事への姿勢や働き方、生き方をも考えさせられる研修となった。日々創意工夫を凝らして努力しているミンカの皆さんからご指導をいただき、本当に貴重な機会であった。丁寧に指導してくださった方々への感謝と研修で学んだことを忘れず、今後も努力していきたい。

１年間の研修を通して、秋田県教員育成指標の第３ステージにいるということを自覚することができた。経験年数を重ねるうちに、無意識に、時には意識的に自分の得手・不得手で業務に線引きをしてしまうことがある。それは、教員それぞれの個性を発揮するという意味では必要なことだと言える場合もあるが、中堅研を機会に、自己の資質を向上させる意識を強くもち、様々な活動や業務に前向きな姿勢で取り組みたいと改めて感じた。第３ステージに立つ教員として求められる資質を身に付けられるよう、すなわちミドルリーダーとして学校や地域の先頭に立てる教員を目指し、積極的に学校運営に参画しながら研鑽を積んでいきたい。

家庭科　科目「家庭総合」学習指導案

秋田県立雄物川高等学校　　小松　久子
日時：令和２年９月４日（金）４校時
対象生徒：秋田県立金足農業高等学校
３年Ｌ組３４名
教科書：第一学習社
「家庭総合～ともに生きる・未来をつくる」

１．単　元　名　　６章　食べる　３節　食生活の安全のために　①食生活の安全と衛生
〔学習指導要領　内容（４）生活の科学と環境　ア　食生活の科学と文化〕

２　単元の目標　　栄養、食品、調理及び食品衛生などについて科学的に理解させ、食文化に関心をもたせるとともに、必要な知識と技術を習得して安全と環境に配慮し、主体的に食生活を営むことができるようにする。

３　単元と生徒　　生徒観：男子２２名女子１２名、計３４名の造形緑地科で学ぶ生徒である。積極的に発言する生徒や、じっくりと課題に取り組む姿勢の生徒がいる。造園緑地科での専門的な学びからデザイン力があり、生活に関する内容について興味・関心をもって取り組むことができる。

教材観：日本の食生活や衛生環境は改善されているものの、食中毒は毎年発生しており、その原因は細菌・ウィルスによるものが多い。中には死に至るものもあり、私たちの安心・安全な食生活を脅かすものである。そのため、安全で衛生的な食生活を営むには、家庭での予防が必須であることを理解させるとともに、自己の生活に活かす実践力を身に付けさせたい。更に感染症が拡大していることから、食の安全確保の側面からも感染症対策への意識を高めたい。

指導観：食中毒は細菌・ウィルスによるものが多く、家庭内での予防が必須であることを理解させる。また、事例から問題点に気付かせ、食中毒予防のための具体的な実践を考えさせ、自分自身の食生活にも結びつけられるようにする。その後、授業で学んだことを活用して食中毒予防カードを作成し、自分だけでなく家族や周囲にも実践を広げられるようにしたい。

４　指導と評価の計画　（２３時間）

次	学習内容（時数）	評価規準			
		関心・意欲・態度（A）	思考・判断・表現（B）	技能（C）	知識・理解（D）
1	1　人の一生と食事（3）	・家族や自分の食生活について，栄養や健康とかかわらせて考えようとしている。 ・行事食，郷土料理，伝統的な加工食品などの食生活の文化とその背景について考えようとしている。	・自分の食生活を振り返り，現代の食生活の傾向と問題点について考え，まとめたり，発表したりしている。 ・地域の行事食や日常食など，食文化を主体的に伝承することの意義について考え，まとめたり，発表したりしている。	・主体的に食生活を営むために必要な情報を収集・整理することができる。	・毎日の食生活が健康と深く関わっていることを理解している。
2	2　栄養と食品（3）				・日常用いられている食品の栄養的特質，調理上の性質について科学的に理解している。
3	3　食生活の安全のために（本時1／3）	・健康や安全に配慮した食生活について考えようとしている。	・近年の食品の安全性について思考を深めている。	・健康や安全に配慮した食生活の管理ができる。	・食品の腐敗，食中毒，食品添加物，社会における食の安全確保などについて理解している。

4	4　食生活をデザインする （１４）	・食生活の多様化や食環境の変化に関心をもち，調理実習・実験に取り組んでいる。	・調理実習を通して，食品の購入から生ごみの廃棄，排水，加熱調理のエネルギーなど，環境の維持や持続可能な社会を構築する上で求められる食生活の在り方について考え，工夫している。	・食生活の自立に必要な基礎的な調理ができる。 ・資源，エネルギーに配慮した食品の購入，調理，保存などができる。	・日常の食事における料理の盛り付けや配膳の仕方，食器の種類や特徴などについて，食生活の文化的な側面から理解している。

５．本時の実際

（１）本時のねらい

家庭での食中毒の予防方法を食中毒の原因を踏まえて考えることができる。【思考・判断・表現】

（２）学習過程

学習内容		学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入5分		１．食中毒の原因を考える。	・家庭内の食中毒は、細菌・ウィルスによるものが多いことを認識させるため、グラフを提示する。	
展開35分	食中毒の予防方法を考える	学習課題　家庭内での食中毒予防の方法を考えよう ２．事例について、食中毒につながる問題点と改善点を考える。 （個→グループ） ３．グループシートに記入する。 ４．黒板に掲示する。 ５．食中毒予防の三原則を理解する。	・他者から気付きを広められるように、グループでも問題点と改善点を挙げさせる。 ・改善点について深く考えられるよう、グループごとに購入・保存・調理・食事の過程に分けて考えさせる。 ・全体で考えを共有できるよう、グループシートを黒板に掲示させる。 ・発表内容から改善点の共通点に気付かせることで、食中毒予防の三原則を理解させる。 ・消費者としてだけでなく、生産者としての安全・衛生管理の視点を考えられるように、食品工場におけるＨＡＣＣＰについても触れる。	自分の家庭で食中毒を予防するための方策を自分の言葉でまとめることができている。 【思・判・表】 ・ワークシート ・観察
まとめ10分	学習のまとめ	６．自分の家庭内で、食中毒につながりそうな問題点はないか振り返る。 ７．問題点をなくすための方法を家族で実施できるように「食中毒予防カード」を書く。	・自己の生活での実践に結びつけられるように、問題点を振り返るように助言する。 ・家庭全体での意識向上を意識して作成するよう助言する。	

令和2年度 第2回 授業アンケート 集計結果

1 目的 教員各自の指導力向上および授業改善のため

2 時期

（1）アンケート調査の実施・・・１２月１８日（金）まで

（2）集 計 ・・・１２月１８日（金）まで

3 集計結果

R2 全体平均

		平均①	平均②	②－①
A	授業の仕方	3.84	3.86	0.03
B	授業規律	3.86	3.87	0.01
C	研究主題	3.79	3.84	0.04
D	学力向上	3.77	3.82	0.05
a	授業準備	3.49	3.55	0.06
b	授業姿勢	3.79	3.80	0.01
c	研究主題	3.56	3.58	0.02
d	学力向上	3.38	3.48	0.10

R1 全体平均

		平均①	平均②	②－①
A	授業の仕方	3.68	3.76	0.08
B	授業規律	3.73	3.78	0.05
C	研究主題	3.64	3.73	0.09
D	学力向上	3.59	3.67	0.08
a	授業準備	3.31	3.36	0.06
b	授業姿勢	3.73	3.73	0.00
c	研究主題	3.33	3.47	0.14
d	学力向上	3.26	3.34	0.08

4 授業改善に向けて

（1）「課題と改善策」をまとめ、指導主事訪問1ヶ月前課題に照らし合わせ、授業改善に取り組んだ。

（2）相互授業参観で情報交換を行い、他教科の取組を参考に改善に取り組んだ。

（3）生徒の「自分自身の取組」の評価が低い。自ら課題を見つけて学習に取り組めるような工夫が必要。